※
挿し絵依頼中につき
暫定表紙です
挿し絵完成後に
表紙変更と共に
最終版をUPします

ツキモノ

-白-

Studio ***46

目次

⊠１：月明かりの下で
. 3
オマケ：黒 12

⊠２：やまない雨
. 17
オマケ：光 26

⊠３：星降る夜に
. 31
オマケ：闇 40

⊠４：あと五分
. 45
オマケ：紅 54

⊠５：ツキモノ、始めました
. 61
オマケ：赤 70

☒１：月明かりの下で

図1：分類について

　ただ生きていくだけで、何でこんなにしんどいんだ。
　一歩ごとに軋むアパートの階段を昇りながら、瀞(せい)は毒づかずにはいられなかった。
「はーい.....今日も午前様、っと.....」
　苦学生の一人暮らしを甘く見ていた。それでなくとも瀞はワケありなのに、独力で都会に出て苦労しないわけがなかった。

　灯りのない外階段は異様に暗い。バイトで疲れた体に四階は遠い。川沿いで湿気の多いムカムカな空気が、胸から足まで充満しているのかもしれない。
「わかったよ.....いい酒だっていうのは、もうわかったから.....」
　未成年の内は飲酒しなくていい約束は、初日から破られていた。ホストのように客の話相手をさせられ、酒が頼まれてもマスターは止めない。瀞が断っても客の機嫌を損ねてしまう。

　瀞はイケメンだと気に入られている。体は細いが筋トレをかかさず、烏の濡れ羽色の短髪は丁度良いクセの無造作ヘアだ。切れ長の目色は珍しい漆黒で、客の前では円(つぶ)らな瞳を心がけている。
「っつーても、そろそろ黄疸来てんじゃないの、これ.....」
　夜中まで働き、日中は専門学校に行くと毎日体調が悪い。やっと上がった四階の廊下で、月明かりに腕をかざすと黄ばんで見えた。色白だから人並みの肌色は危険信号だろう。瀞は元々酒に強くない。いつもトイレで吐いているが、自己責任なので女々しい姿だけは誰にも見せたくなかった。

　二年間。卒業するまでの我慢だ。そのために高校時代からバイトで学費を貯めた。それでも最近、酷くがっくりしたことがあって、気力が大分削がれてしまった。
　瀞のようなワケあり者に、普通の幸せは難しい。その中で辛うじて見つけた救いの光は、瀞などの手が届くものではなかったのだ。
「あーあ.....これなら最初から、出会わない方がましだったかな.....」
　四階の端の自宅までつくと吐き気が込み上げ、扉にもたれて座り込んだ。下宿の中で嘔吐は避けたい。俯くと吐き気が強くなるので、落ち着くまで月を見上げることにした。

　月明かりなんて幻と同じだ、と瀞はいつも思う。自ら輝き続ける星とは違い、地球を外れる光の欠片を掬っているだけ。掴んだつもりが儚かった、あの救いのように。
　暗い深夜のＣ型の月は、夕方に出る三日月ではなく、二十六夜の月だろう。細いわりには妙に明るく、月下には白い光のアーチが、町の影まで足を降ろしていた。
「え……まさか……」
　月明かりの下で架かる白光の橋。そんな馬鹿な、と瀞は息を飲んだ。思わず立ち上がり、廊下の柵から身を乗り出した。
「こんな明るい所で、月虹（げっこう）って……しかも、三日月で？」

　太陽の光が七色の虹を作るのと同じように、月明かりも白（しら）らかな虹を映すことがある。それは「月虹」と呼ばれ、町の灯に隠されない暗い地域で、満月など強い光の時にしか見られない。瀞も故郷で見たことがあるきりで、故郷の隣町など、美しい星の町と名乗るほど真っ暗な町並みなのだ。
　それなのにこの都会の夜に、有り得るはずのない月虹。
　月虹を見た者は願いが叶う。古い曰くを思い出して、慌てて願いを考えようとしたところで――……その運命の「月モノ」は、訪れていた。

　ふわりと、月明かりを見上げる瀞の前へ、強引に降り立った黒い人影があった。
「――こんばんは！　死神ちゃんでっす！」
「――は？」

　突然視界が遮られ、両手の間に何かが着地したので、反射的に後ろへ飛び退った。急だったので腰をついてしまった。
　月光を背にする相手の顔はよく見えない。ハスキーな声で何やら幼げに、とても楽しそうに叫び始めた。
「おめでとー、お前は見事、『ツキモノ』に選ばれました！　今なら高待遇買い取り中、是非この死神ちゃんに、お前の体を売りませんか！」
「って、ちょ、声……！」
　この壁の薄いアパートで、夜中に大声は困る。人影は右で束ねた長い髪を揺らしてきょろきょろすると、柵から廊下に無音で着地し、改めて笑いかけた。
「大丈夫。オレが見えてるのはきっと、お前だけだから」
　座り込む瀞の前に、しゃがみ込んで言う。足下の影が周囲の影より薄く、人影と瀞だけを乗せるように周囲に広がっていた。

「え、は……え……？」
　わけがわからないが、隣近所が怒って出てくる気配はない。

酔い頭でなくともあまりに謎な状況。瀞は口をぱっくり開けたまま、間近になった人影の全貌を否応なく観察する。

両足の間で、こじんまりとしゃがむ人影。青みのある白銀――月白(げっぱく)色の髪束が、ちょうど瀞の目前でサラサラと垂れている。

まずその髪色だけでも稀少だ。加えて正面から瀞を見つめる小さな顔はCGかと思うほど整い、薄蒼く鋭い目がきらきらと光っている。それでも幼さを感じさせるのは、猫のような牙のせいだろうか。

「え、と……あんた、どちら様……？」

やっとそれだけ口にできた。季節外れの黒いダッフルコートをまとう人影は、えー、と目を細め、無害そうな顔で笑った。

「だから、死神ちゃんだって。冥府の化身たる月、そこへ導く月光の天使と言えばわかりやすいかな？」

笑顔は平和だが内容は不穏だ。言葉通りであっても、何かの妄想であっても。

どうしよう、変なのに絡まれた。関わりたくない、早く寝たい、瀞はそれだけを願った。

「えっと、それじゃ、死神ちゃん様……おれもう、帰っていいですか？」

「え？　こんなラッキーハプニングを不意にするの、お前？」

両手で頬杖をつき、小悪魔のような笑顔が可憐だ。うん、きっと酔っている。珍しい事態なのは認める。それでも瀞は至って常識家だった。

「すみません、おれは一般人です、天から降ってきた謎の美人はいらないんです」

酒のせいで少し胡乱だが、自称死神は体を売りませんか、と言った。それを思えば的外れな回答でもあった。

自称死神も両腕を組んで、ふくれっ面を浮かべる。

「ちがーう！　オレをお前にあげるんじゃなくて、お前をオレに売れって言ってるの！」

「え……それはいったい、おれに何の得があるんですか……」

「だってお前、お金ほしいんでしょ？　『ツキモノ』の仕事に就いてくれれば、今みたく毎日へろへろになるまでお酒を飲まなくて済むよ？」

「へ……それはいったい、どういう仕事なんですか……？」

頭が回らないので話を合わせ、断る理由を探すことにする。ところが自称死神は、うむむと考え込んでしまった。

「あー、それ。うーん、えーっと……何て言うのかな、お前の場合……」

何だ、その詐欺くささは。穏健派の瀞の視線もさすがに白ばんできたが、自称死神が再び笑う。

「たとえば、生きたくても生きられない運命の人、もしくは人間になりたい化け物に愛の手を！　そんなとこかなぁ、えへへへ」

えへへへ、じゃねえ。理解できないが存外な重さだ。自称死神が更に続ける。

「月にはウサギ、酒にはツマミ、人にはキツネ、これ皆ツキモノである！　そう言えって言われてるけど、オレにもよくわかんないんだよね」

結局何もわからなかった。何にせよ瀞は、自称死神にスカウトされているらしい。それなら一応尋ねたいことがあった。
「それで……今なら高待遇って、どんな待遇？」
「うん、それそれ！　月虹が見えてるお前だけの特権！　１ＬＤＫの家付き、バストイレ別でペットＯＫ、駅近家具付きで快適だよ！　給料は仕事によるけど家賃はいらないし食材も支給あり、二週間働けば二週間は休める契約でいいってボスが言ってた！」

今度は流暢に出てきた売り文句に、両目を瞠(みは)った。それはさすがに高待遇過ぎる。月虹がどうとか言っているので、確かに奇跡的な内容に思える。
それでも瀞が願おうと思ったのは別のことだ。しかしそちらは叶う保証もないので、本気で話を聞いてみることにした。
「あの、それ……風俗とか、もしくは違法の何かじゃないよな？」
「有り得なくはないけど、嫌な仕事はやらないでいいよ。オレもその辺は考えるよ」
きたぞ。もう騙されないぞ、と瀞は難しい顔で見返す。
「その約束、書面にしてもらえるの？　おれじゃなくてボスからちゃんと断ってくれる？」
今のバイトも酒を飲ませるのは客だ。自称死神が考えてくれたところで、ボスや客には逆らえない可能性がある。
「あー、大丈夫、仕事は自分で選ぶ方式だから。色んな仕事が来るけど、自己責任で選べってボスは言うよ」
なるほど、まさか仕事内容まで選べる待遇であるとは。自称死神は、オレも選んでここに来たよ、と付け加えた。
「お前はわからないだろうけど、オレのこともあの月虹も、多分お前にしか見えてないからねえ」
こんな勧誘も仕事の一つで、そうして自分で仕事を作ってもいいらしい。話が上手過ぎるが、現状で体が壊れそうな瀞には選択肢は少ない。風俗や犯罪でないなら、家賃と食費が浮くのはとても大きい。
後は野となれ山となれ。今より悪ければ辞めればいい。辞められないことはないはずだ、書類手続きの時にでも確認すればいい。理性を保てているつもりの瀞は、決断を下すのに迷いはなかった。
「それじゃあ……それで、いい、かな」
「ほんと!?　やったー、それじゃ、よろしく！」
きゃっ、と喜ぶ自称死神の笑顔が、何故か可愛い女の子に見えた。
それじゃ、すたんどあっぷ！　というので立ち上がると、自称死神が突然、ふっと消えた。

あれ？　と思った瞬間、先刻まで薄明るかった足元に暗闇が差した。
え、と戸惑う間に、背後から音もなく現れた誰かの影が見えた。

「え……え？」
　誰かが急に瀞の背中に、ごつい指圧をぐいっと押してきた。痛みは感じず、それどころか究極の快感を押し込まれた気がして、へたりと瀞は石臭い廊下に崩れ落ちた。
　何だこれ、すっごく気持ちいい……夢現で眠る時のような全身の弛緩。押された二ヵ所から優しい温かさが広がる。体中を回っていたアルコールまで、一瞬で浄化される爽快感がある。

　俯せに倒れ、ほわほわとする体にコンクリートが心地良かった。
　あれ、ひょっとしておれ、死んだわけかな。死神ちゃんと虹の橋を渡って月に逝くのだろうか。体も何故か動く気がしない。動かす必要性も感じられない。生きていくだけでしんどい、その感覚から解放されたのは初めてだった。
　しかしそんな瀞の安らぎを余所に、ずっといた誰かが静かに声をかけてきた。
「どう？　紫音（シオン）」
　そう言えば誰だろう、と今更思った。そして紫音というのも誰なのだろう。
　そこで厳然と、思わぬ事態が瀞を襲うことになる。

　瀞の喉が突然、瀞でない者の声を紡いだ。
「うん、適合できた。やっぱりこいつ、オレと同じ月モノで間違いないよ」
　それは紛れもなく、自称死神の声色。喋るだけでなく、せっかく至福だった体が勝手に、後ろの誰かに向かって起き上がった。
「珍しい月属性を持つ人間、か。これでやっと、紫音にも体ができたな」
　自分の意志と無関係に動く体を、誰かがそこで、抱えるように優しく立ち上がらせた。瀞はやっと、え！　と事態の一端を察した。

　体はやはり勝手に、ぎゅうっと誰かを抱きしめてしがみついた。
「わーい、烙鍍（らくと）―！　これでやっと、生身で一緒にいられるね！」
　これまた季節外れの黒いコートを着込む、銀髪でロック歌手のような青年。それに抱き着く瀞の背から、にょきっと二つ、黒い羽が確かに生えた。

　ちょっと待てええ！　とりあえず瀞は、動かせない体の内で力の限り叫んだ。
　現実には声は出なかったが、抗議の意思自体はちゃんと、体を動かす「紫音」に届いたらしい。青年の腕の中に納まったまま、はて？　と首を傾げる。
「あれ？　もう契約は終わったけど、お前、何か不満なの？」
　契約ってどういうことだ。叫ばなくても紫音には聞こえていた。
「最初に言ったじゃん？　お前の体を、オレに売れって」
　それでいいって言ったじゃん、と心から不思議そうにしている。瀞はただ、詐欺だ！
　と怒る。

　まさかそれが言葉通りに、「体を売る」ことだと誰が思うのだろう。「ツキモノ」という仕事も、こうして紫音に体を使わせること自体なのか。人間になりたい化け物に愛の手を、とはそういう意味だったらしい。
　そして今から、銀髪の青年、烙鍍が住む家に居候するという。家付きとはそのことで、生えた羽はとり憑いた紫音のものというわけだった。
「後の仕事はオレがやるし、お前はゆっくりしてればいいよ。何が不満なの？」
　死神を名乗った紫音は、月光の天使。つまり光であり実体を持たないモノだが、烙鍍と共に生きると望んだために、とり憑くことができる稀少な宿命の人間を探していたというのだ。

　烙鍍が何者かは知らないが、先刻からずっと、瀞の頭を愛しげに撫で撫でしている。瀞が一番我慢できない点はそこだった。
　やめやめ、やめます！　おれ、男といちゃいちゃしたくないんです！　と差し迫った思いを伝えると、紫音は更に、あれ？　と、大きく首を傾げた。
「え？　だって、お前.....」
　そこで紫音は、ワケありの瀞が幸せを掴み難い理由を、あっさり口にする。
「だってお前、女の子でしょ？」

　月属性云々という謎な話よりも、瀞にとっては余程、根源的であるその秘密。それを何故知っているのか。
　これが酒の上の悪夢でないなら、思考のぶっ飛んだ化け物には尋ねるだけ無駄だろう。そもそもたとえ女だって、見知らぬ相手といちゃいちゃしたくはないだろうに。
　とにかく瀞は生まれた時から、この女の体と本当の自分は違うと感じて育った。親元を離れたのも「男として生きたい」からだ。
「えええー。お前、オレと同じで、オレっ娘なのかと思ってたのにい」
　それはむしろ、オマエがどうなってるんだ。言われてみれば先程までの自称死神は、オレ口調でさえなければ、どう見ても女の子だった。

　そんなわけで、おれは男だと訴える瀞に、紫音が困ったように考え込んだ。
「まいったなあ、月属性って陰なのに、陽も強いところまでオレと同じ宿命か.....陽って男度って言うし、陽光が強まれば反射する月光も強まるわけか、それでこの月虹かあ、しまったなー.....」
　謎だらけの化け物事情を口にしているが、一応悩んでくれている。それに安心しかけたが、他人事という顔の烙鍍が、くっつく体は離してくれたものの、最悪な合いの手を入れてきたのだった。

「そんなこと言っても、一度植えた羽を回収しようと思ったら、もう殺して奪うしかなくなるけどな？」
　烙鍍の言う通りだと紫音は悩んでいる。そんな大事なことは先に説明しろと瀞は呪った。「二週間働いて二週間休む」契約の通り、瀞も体を使うことはできるらしいが、紫音が瀞から出て行くのは難しいという。
　そして紫音は、烙鍍といちゃいちゃしたいのだ。そのために体を探したのに、これでは本末転倒になる。諦められない、うううう、と悩んでいる。

　視界が暗転しかけた瀞に、助けの手を差し伸べたのは――
　瀞がここのところ、気力を失ってしまった原因。思ってもみないあの救いの光が、いつ階段を昇ってきたのか、彼らの後ろにひっそりと現れていた。
「……烙鍍、紫音。私、それ……聞いてない」
　びくっと。紫音と烙鍍の背筋が伸びた。おそるおそる、バツが悪そうに背後を振り返る。彼らも驚いたようだが、瀞は卒倒しそうになった。
　そこにいた娘、黒い上着とニーソックスが特徴的で、シンプルな灰色のツーピースの姿は、専門学校同級生の棯（うつぎ）文漓（カザリ）だった。

　地味な黒髪でツインテールの文漓は、いつも聡明で大人しい。鮮やかな蜜柑色のリボンが似合う頭。この場の事情も察しているのか、糾弾するように紫音を見つめる。
「茨月（しづき）くんをうちに連れてくるって、言って出たの……そういうことだったの？」
　口調は厳しく、おそらくとても怒っている。紫音が思い切り目を逸らし、烙鍍はハハハ、と逆に開き直った。
「それはまあ、もう。大事な妹に彼氏ができたら、監督するのは兄の役目だし」
「……私、妹じゃないし」
　要するに二人は双子らしい。そういう関係だったのか、と瀞は納得する。それなら性別を知られていたことも、有り得ない話ではない。
　烙鍍の言う通り、瀞は先日文漓に告白し、体が女の正体も知られていた。それでも文漓は受け入れてくれた。ただしそれは、「来年二月二十四日まで」という条件付きで。
　喜びが大きかった分、失望も大きかった。自分はその程度の存在だと思い知らされていた。

　……ということは、と。瀞は重大な事実に思い当たった。
　瀞＋紫音が烙鍍の家に行く。それは文漓の家でもあるのだろうと。
「え、何？　　お前、いきなり、契約ＯＫしちゃうの？」
　意思がすぐに伝わる紫音が驚く。告白したばかりの文漓と同棲できて、オマケに仕事も減らせるのなら、誰が嫌だと言うだろうか。最初からそれを言ってくれれば良かったのだ。

　文漓がそこで申し訳なさそうに、紫音である瀞をじっと見つめた。
「……ごめんね、茨月くん。私が、茨月くんの体調が心配だって、烙鍍達に相談したせいで……こんなことになって」
　さりげなく事情の説明までしてくれる。紫音が空気を読んだのか、瀞はようやく、自分の声を出せる――体を動かせる状態に戻っていた。
「そんな、何で文漓が謝るんだよ！　あんまり時間ないし、一緒に暮らせるならその方がいいに決まってるだろ！」
　そこでにまりと、烙鍍が笑ったのは見過ごせないが、文漓は少し顔を赤らめて、まっすぐ瀞を見つめ直してきたのだった。

　文漓は二月の終わりには、実家に帰らないといけないらしい。何やら婚約者に近い相手もいて、毎日隣に座る瀞に惹かれていたが、今だけしか一緒にいることはできないと言った。
　孤高で人を寄せ付けない文漓は、とても可愛いのでモテモテだったが、当初瀞は良い印象を持っていなかった。基本無表情な上に、長い前髪で片目が隠れがちで何を考えているのかわからず、もう少し笑えばいいのに、と思っていた。
　男装して通学する瀞もわりとモテているが、正体を知られたくないため、誰とも迂闊に付き合うことができない。互いに無関心な文漓と隣に座るのは気楽で、文漓もアプローチして来ない瀞に安心していたようだった。

　その関係が一転したのは、ひとえに文漓の観察眼によるだろう。文漓はある時、人目のない場所で、本当は女の子？　と不意に尋ねてきた。仕方ないので事情を話し、内密にしてくれるように頼むと、無愛想な文漓がその時初めて、心から嬉しそうに笑ったのだ。
　じゃあ、二人だけの秘密だね、と。その笑顔のギャップに、瀞があっさり落ちたのは言うまでもない。

　だから瀞は、「文漓がずっとここにいてほしい」と、月虹に願いをかけたかった。
　ここで居候できたところで、それは叶わないかもしれない。遠い白光にいくら手を伸ばしても、掴むものは虚空ばかりだ。
　それでも文漓が心配してくれたこと――バイトの話なんてしていないのに、瀞の窮状に気付いてくれたことが、ただ嬉しかった。人の願いとはそうして、手の届く温かみに触れられたなら十分なのかもしれない。

「……本当に、いいの？　茨月くん」

　少ない荷物を慌ててまとめ、下宿を後にした瀞に、文漓が不安そうにまた尋ねてきた。
　正式な引っ越しは後日にすればいい。バイトも辞める連絡を入れてやる。うきうきとした足取りの瀞と、兄妹共に静かな烙鍍の三人で、もう消えかけている月虹の下を歩く。
「いいのいいの。上手い話には裏が付き物ってくらい、昔から当たり前だしさ」
　月光の天使という紫音や、それと付き合う烙鍍が兄であるなど、文漓は謎だらけの人物になってしまった。これからする「ツキモノ」の仕事も謎だらけだが、女に生まれたのに男である瀞からして謎なのだから、気にしないことにした。

「今日は本当に、月がキレイだな、文漓！」

　星々なんて霞ませる月明かりの下で、あの時と同じように、文漓が幸せそうに笑った。
　その光が幻と同じだとわかっていても、瀞は縋らずにはいられなかった。

月明りの下で　-了-

オマケ：黒

　居候というものは、肩身が狭い。
　文漓（カザリ）の下宿が１ＬＤＫと聞いた時点で、三人暮らしに狭いのはわかったが、ほとんど荷物のない烙鍍（らくと）とリビングを二人で使うことになり、案外瀞（せい）の使えるスペースは広かった。烙鍍はそもそも不在が多く、何をしているのか未だに全然わからない、自称「月夜烏（つきよがらす）」だ。
　文漓は当然自分の部屋を使い、三人で何かする時にはダイニングに集まる。今までの瀞のユニットバス１Ｒに比べれば、果てしなく快適だと言えた。

　だから狭いのは居場所ではなく、瀞自身の了見に尽きた。
「なーなー。キスくらいダメ？　　なー」
「駄目に決まってます。妹の彼氏に手を出さないで下さい」
　ごろりと寝床のソファに横たわり、頭を傾けて瀞を見る烙鍍。あくどい顔でにやにやしながら、パソコンに向かう瀞に今日もモーションをかけてくる。
「それならお触りは？　　お手々を繋ごう、からでもダメ？」
「駄目です。あんまりしつこいと文漓に言いつけますからね」
　文漓がいないとすぐにこんな話題になる。
　瀞はビタ一文支払っていない居候であり、烙鍍の女（？）である紫音（シオン）が瀞と共に在る以上、ある程度は仕方ないと割り切っているが。

　専門学校の通学上、日中は瀞が今まで通り体を使うが、それ以外の時間は紫音に変わることが多い。瀞はまだ「ツキモノ」の仕事がよくわからず、主に紫音に任せている。羽も必要時以外はしまえるそうなので、人間として生きていくのに今の所不都合はなかった。
　基本的には、新月から満月までという条件で仕事が始まり、満月から新月の期間は休みだという。「二週間働いて二週間休む」システムの内訳だ。何かあった時や、自分の意志で延長する分には構わないらしいが、次の新月を越えるなら客から更新料金をもらう制度だった。

　朔夜に仕事が何個か入ってきたら、ダイニングで烙鍍と文漓と集まり、誰がどの仕事を請け負うかを決める。誰もやりたくない仕事は受理されない。
　居候を始めて最初の満月を二日過ぎたところなので、烙鍍も紫音も休息期間なのだろう。外泊の多い烙鍍が珍しくリビングに入り浸っていた。

　月夜烏――遊び人を自称する烙鍍は、銀髪にビジュアル系っぽい黒装など、いかにも軽そうな風貌をしている。細いわりには鍛え抜かれた体と身のこなしで、今日は黒いタンクトップの部屋着を着ているが、パソコンに向かう瀞の後ろで、背もたれに両手をついて瀞を見下ろしてきた。
「つまらないなー。何か相手してくれよー」
「駄目です」
「それじゃ、ハグくらいは？」
「それくらいは.....紫音の時なら、別にいいです」
　あまり断り過ぎても紫音に悪い。烙鍍の膝で眠ったり、猫のように撫でてもらうのが紫音は好きらしい。多少の妥協点は考えなければ、と遠慮しての答だった。
「やったー。じゃあエッチは？」
　ぶふぉっと、危うく大事なモニターに向かい、飲んでいたコーヒーを噴き出しかけた。
「絶対駄目に決まってんでしょおが!!　そろそろ訴えますよ烙鍍さん!!」
　冗談かと思ったが、烙鍍を見上げると蒼い目が邪悪さに満ちている.....ように、怯える瀞には見えた。

　嫌な予感がしたので、椅子を回して烙鍍を振り払おうとしたが、時すでに遅かった。
　烙鍍が椅子ごしに瀞の首に両手を回し、まるでバックハグの体勢になってしまった。
「ちょ、烙、さ.....！」
「あんたさあ。オトコを名乗るなら、これくらいのノリにはついてこいよ？」
「.....は？」
　話が思わぬ方向に行った。烙鍍の雰囲気は冷静そのものだった。
「同年代でも浮いてない？　　オトコ歴けっこう短い？」
「何でですか！　　下ネタできなきゃ男じゃないって誰が決めたんですか！」

　腹が立つが、かなり痛いところを突かれてしまった。瀞は高校卒業まで一応女として過ごし、周囲に適当に合わせることはできたが、男女どちらのコミュニティにもとけ込めずにいた。
　誰も自分を知らない町に来て、やっと男装生活を始めることができた。大人数の専門学校なので、教員はいちいち生徒の性別を把握していない。
　とにかく腕をほどこうとすると、あっさり烙鍍は瀞を解放し、冷めた声色で背中を向けた。
「ホントは誰しもそうなんだろうけど。俺が感じる男の世界と、あんたに見えるオトコの世界は、随分と違うんだろうな」
　そうしてぐでん、とソファに戻っていった。
　からかわれたのか、と怒りが込み上げてきたが、言うこと自体はわからなくもない。本当に「男性」の烙鍍にとって、瀞の存在は異質で当然だろう。

こうしてたやすく他者に踏み込む烙鍍が、その勘の良さ故に月夜烏たり得ることを、わなわなと沸騰する瀞は知る由もない。

考えてみれば恐ろしい話だった。この遊び人と瀞は当面ずっと、同じ部屋で生活するのだ。
——烙鍍（アイツ）、体が女なら誰でもいいのかよ.....!?
問い詰めようと思ったがやめた。万が一、「男でもいいけど？」などと返ってきた日には、ますます瀞の平穏が危うくなってしまう。
リビングの景観を少しでも維持するために、瀞は前のアパートで使っていた布団を実家に送り返し、寝袋で寝ていた。親には良いベッドを買ったから、と言い訳している。
今となっては英断だった。無防備な布団ですやすや寝ていたら、いつ襲われるかわかったものではない。
居候だから仕方ない。そう言い聞かせつつ、瀞が契約——同居を受け入れた時に、にまりと笑った烙鍍の顔が頭から離れなかった。
これではいけない、もう少し文漓と仲を深めなくては。学費に関してはスポンサーがいるらしいが、家賃と食費を負担してくれる彼女にはすっかり頭が上がらない。勉強も文漓の方ができるので、とりあえずもっと体を鍛えてかっこよくなることを当面の目標にする瀞だった。

気分転換にいつもの筋トレを始めると、烙鍍が退屈そうに眠り込んでいた。色気がない光景だからだろう。
これで良し、と内心で手を握る。後は文漓が帰る前に、リビングとダイニングを掃除してご飯を作っておきたい。手先が器用で要領の良い瀞は、家事が得意なのだ。
主婦っていうな、と一人でつっこんでいた。
これで良いのだろうか.....と一抹の不安が頭をよぎったが、近頃戦友となった床拭きワイパーを手に取ると、雑念は全て消えていった。

-了-

☒２：やまない雨

　生まれた時から瀞(せい)は強くなりたかった。
　そう言うと必ず「大袈裟な」と思われるだろうが、「かっこいい」ことが至上だと幼少時から憧れていた。母曰くオモチャも男の子向けの物ばかり好んだらしい。
「あー、ごめん、かーさん！　　これから新バイトの初日だからもう切るよ！」
　機能性重視のスマホの向こう、母の文句が強制終了された。都会に出たばかりで黄金週間にも帰郷しなかったので、何度も心配の電話がかかってくる。
　高校時代にひたすらバイトして学費を貯め、親の反対を押し切って一人暮らしを始めた。そんな自分の奮闘も「かっこいい」から頑張れた。目指すは一つ、親には余計な気苦労をかけず、目の届かない所でかっこよく生きることだ。

　専門学校が普段より遅くなってしまったため、慌てて走りながらスマホをしまう瀞に、身の内から同居人の眠たげな声が聞こえた。
――つまりお前には、『かっこいい』が最重要なワケ？
　道順の目印の交差点を探しながら、一度立ち止まって息をついた。呼吸と共に肩が上下してとても喋るどころではないが、そうだよ！　　という内心の返答は伝わったらしい。
――それじゃー、かっこいい女のコになれば良かったんじゃない？　　男になるんだって思い詰める必要、ないんじゃないの？
　うるせー！　　と体内の天使に遠慮なく呻く。すっかり瀞との同居に馴染んでしまった憑依者の紫音(シオン)は、オレ口調のくせに一応女らしい。自称天使という霊体だけのバケモノなので、そもそも性別があるのか初期には大いにつっこんだのだが、烙鍍(らくと)が男だから女になるの！　　という理解不能な返答があった。

　烙鍍は瀞と同級生の棯文漓(うつぎカザリ)の双子だ。烙鍍のオンナという紫音が瀞にとり憑いたために、瀞は文漓と烙鍍の家に住めることになった。それは文漓と付き合い始めたばかりの瀞には僥倖で間違いがない。だから紫音には感謝しているのだ。
　こうして毎日、互いへのツッコミ合戦が起こるうざったさを除けば。

　もうすぐバイトの依頼人のマンションに着くので、呼吸を整え、日没直前の空を見上げながら瀞は断言した。
「紫音。おれはおれのなりたい人間になるの。かっこいい男になるためにこんなバイトだってやるんだから、黙って見ててくれよ」

何かと口を挟んでくる紫音は、おそらく決して悪意ではない。善意でもないが、瀞に対して興味が尽きない様子は母性に似て思える親身さだった。

紫音は元々、瀞が女だからとり憑いたらしいバケモノだ。だから瀞を女の道へ立ち帰らせようとする、のだと思っていたが、どうもそう単純でもないのが最近は伝わる。
――めっちゃガチガチに緊張してるくせに、よく言うよ。カザリがこれだけお前向きの仕事キープしてくれたのに、お前、小心者だよね？
「るせーなあ！　初仕事で緊張しないバカがいるかよ！」
紫音はほとんど緊張したことがないらしい。確かに紫音が瀞の体を使った後は、嘘のように肩こりの調子が良くなる。ところが幻像だけの天使時代と同様に飛んだり跳ねたりしようとするので、危うくマンションのバルコニーから飛び立ちかけたのを慌てて止めたことがある。ホントにオレは飛べるの！　と喚いていたが、アイキャンフライなんてこの体で実現された日には、瀞が社会的に終わる。
体を鍛えるために階段で上がりたかったが、時間がおしていたので仕方なくエレベーターに乗る。そうして瀞の新バイト――「ツキモノ」の初日は、否応なく始まりを告げた。

最初なので、当たり障りの少ない依頼で。と、気の利く賢明な彼女文漓は、いかにも便利屋らしい仕事を勧めてくれた。
「茨月（しづき）くん、お掃除、得意だよね？」

「ツキモノ」は新月から満月まで二週間、最低金額五万円を条件に、依頼人が好き勝手に条件を作り、ネット経由に正体不明の創業者に依頼する仕組みだ。そこから「ツキモノ」所属のバイト達に依頼の情報が渡され、バイト達も各々自己責任で請け負う依頼を決める。文漓のように三年目ともなると、懇意な顧客を囲い込んで電子依頼専門などの身分にもなれるらしい。意味がよくわからないが、要は複数の依頼者と連絡を取り合うだけで文漓はお金を稼いでいる。
ＩＴ系の専門学校とはいえ、通い始めの瀞にそんな芸当はまだできない。文漓宅の居候で家賃も食費も出せていないので、せめて家事を頑張っていた姿を文漓は評価したらしい。
依頼の内容は至ってシンプルだった。二週間、平日の仕事後のみ、可能な限りに家の片付けを手伝ってほしい。家事代行業者を頼めばもっと高くつくだろうから、瀞も頑張るが、素人が来たと怒られるいわれはないはずだ。
「おれなんてせいぜい、畳は茶滓をまいて掃け、くらいの裏ワザ寄せ集めだし.....」
だからがっかりされても気にするな。そうは思いながら、もしもあまりに依頼者の気に添わなかった場合、二度と依頼しないことを条件に費用は免除される。瀞にもお金は全く入らない。その徒労の結果だけは避けたい。

　エレベーターで呑気に上がってきたはずなのに、煩い鼓動を止めない心臓を押さえつつ、個性のない扉の一つで小さな呼び鈴のボタンを押した。
「――はい。茨月さん、ですよね……？」
　覇気のない声がインターホンから響いた。つとめて元気に、ちわっす、ツキモノっす！
　と返すと、空気が少し震えた気がした。

　恥ずかしいんですけど……と、依頼者の灯（あかり）は、長い睫毛を伏せながら、おずおずと瀞を部屋に招き入れた。
「絶対……絶対、秘密は守って下さいね？」
　洲崎（すざき）灯の姿を一目見た時、不覚にも瀞は、かっわいー！　　と少しときめいてしまった。小柄で毛先がくるくると巻かれたセミロングの髪や、フリフリのホームウェアは女子力を感じさせる。しかし、１ＬＤＫのリビングに一歩立ち入った瞬間、瀞の表情筋が固まってしまった。
「えっと……ここがリビング、ですよね？」
「はい。私の部屋は向こうだけど、見ての通り今は入れません」

　その衝撃を何と言えばいいのだろう。服も下着も化粧品も、鞄もアクセサリーも無秩序に散乱していて足場がなく、一面消臭剤臭い住居。ごみだけは台所にまとめて置いてあり、ごみ屋敷なわけではないが、分別はおそらくされていない。
「私、洗濯物を外に干すのが怖くて、でも部屋干しの匂いも嫌いで……クリーニングやランドリーにいってたんですけど、仕事が忙しくなってから行けなくて」
　下着に限らず、洗濯していない衣類やタオル全般にそれは言えるらしい。それでほぼ毎日、新しく着る物を買って帰っては脱ぎ散らかすという。いつかはまとめて洗うのだと己に言い聞かせている間に、何処に置いたかわからなくなる生活品をどんどん新調する。自室が埋まりリビングも消え、今では洗面所に置いたマットで廊下で寝ているらしい。
「なるほど、わかりました。それじゃ今回、おれは洗濯を手伝いつつ不用品を捨てて、最後に乾燥機付洗濯機を買いに行きましょう」
　愛想よく言いつつ、ないわ、と瀞は貧しい胸のシャッターを下ろす。いくら外見は可愛くとも、その裏でこんな代償を払っている人、そこに消えるだろう金額はやるせなかった。

　長くても日付を越えるまで、という依頼なので、大体の片付け計画を立てて初日は終わった。灯も明日いつも通りの仕事があるため、これでも物凄く奮起しての依頼だという。
「休日は頼むから休ませてくれ……って涙目だったよな。いや、おれはいいんだけどさ」
　明日の夜は片付け道具をあらかじめ買って行くため、到着が少し遅くなると先に説明した。経費は灯持ちで、依頼料とはまた別に支払ってもらうことになるため、なるべく計画的に最低限の出費で済ませたい。

灯はそうした計画性が恐ろしく乏しいらしい。全て瀞の言うがままに頷くばかりで、どうしてこの人が会社ではバリキャリなんだ、と世界の七不思議をかいまみた気がした。

帰り道の途中で雨が降って来た。うわ、と瀞は顔をしかめ、行きのようにまた走り始めるしかなかった。
「もう梅雨終わってくれよー。そろそろ六月終わりますよ、空気読んでくれー」
一人ごちながら、月の見えない夜更けの帰路を急ぐ。普通ならあまり手放しに出歩かない方が良い時間帯だ。瀞は男性の恰好をしているし、多少は鍛えてもいるので、万一暴漢にあっても逃げるのは何とかなる。女として田舎にいた頃の、最大の護身術は逃げることだった。男女どちらでもそれは同じと思いながらも、悔しくもあった。
「ヒーローみたいに撃退してみたいよな、ああいうのって」
現実には雨に濡れた程度で不快なのだから、怪我やら被害やらを受けたらこんなことは言えない。そんな自分の情けなさには出会いたくないから、まずそうした事態に遭遇すること自体を避けたい。
自分が本当に男だったら違うのだろうか。鞄をかばいつつ居候宅に向かい、駆けていく道に紫陽花があると気付くのは明日の話だ。

居候宅の文漓のマンションに帰りつくと、深夜にバスタオルを持って出迎えてくれた文漓は、つくづくできた彼女だった。
「初仕事、どうだった、茨月くん？」
瀞のツキモノ初日が気になったことと、急な雨の両方を心配したのだろう。こんな時間まで待っていてくれるのは素直に嬉しかった。
家に上がっても問題ないくらいに全身を拭き終わる。紫陽花の鉢植えを飾る台所に、ホットミルクまで用意してある完璧さが眩しい。
「ありがとう。文漓のオススメだから、何の問題もなかったよ、ほんと」
これから二週間で、できればあの部屋を新居の如くにピカピカにしてやりたい。頭の中でより詳しく計画を立てている現在は、紛れもなく楽しい仕事だった。
「そっか。喜んでくれるといいね、依頼者さん」

蜂蜜入りのミルクを両手に、文漓が微笑む。
ふっと、疲れていても爽快な瀞に比べて、いつも無愛想である文漓の笑顔の方が何処か気になった。
何だか暗い。瀞の前ではよく笑うにしても、この目色は何かが違う。疑問を感じたままに口にする。
「文漓は、どうして――何かあった？」
「――え？」
「何か、疲れてない？　ごめん、おれのせいでこんな時間まで待たせたなら、それ……」
違うの、と一瞬で断言した相手に、瀞は少しだけ苦く笑う。

　否定してもらうことを前提に、あえて自分のせいかときこうとした。それに対して違う、と答えた文漓は、疲れている己は肯定したことになる。ただ疲れてる？　　とだけきけば、大丈夫で答えられて話が終わる。
「じゃあ理由、きいていいのかな、おれ」
　文漓がわりと秘密主義であるのは、居候を始めてニカ月なので大分掴んできた。そろそろ少し踏み込んでみようと腹を括る。

　文漓はちょっと困った様子で、ダイニングとは言い難い台所と繋がるリビングに視線を逸らし、普段の無愛想に戻って大きな両目を伏せた。
「.....大丈夫。ただちょっと.....烙鍍と喧嘩、しちゃっただけだから」
「――え？」
　前髪がアシンメトリーに長い文漓は、俯くと左目が隠れてしまう。
「喧嘩って、文漓と烙鍍が？　　珍しいな」
「そうでもないよ。烙鍍はよく、茨月くんのことも怒らせるでしょ？」
　人懐っこい、もしくは妙に勘が良い烙鍍は、何かとずけずけ人の懐に押し入ってくる。いつもほんのり胡散臭い笑顔で、口先だけで世の中を渡っていそうな、あまり好感は持てない男だ。双子の文漓には特に弱い節があり、居候を始めてから言い合いは見たことがない。

　喧嘩の理由を聞いていいか、悩む沈黙。
　これは多分ＮＧだと瀞は読んで、意識して机の上の薄青い鉢植えに視線を替えた。
「そう言えば、この紫陽花は？　　おれ青い紫陽花好きなんだよね、昔から」
「茨月くんは青が好きなの？　　私も紫陽花が好き。私は赤い方が好きだけど.....」
　これは烙鍍が買ってきたの、と期せずして喧嘩相手の話に戻った。文漓が話したいなら聞いてよいのだろうと、瀞も黙って見つめる。
「烙鍍は紫、紫音は白が好きなんだって。でも茨月くんが好きそうだから、今回は青のにしたって言ってた」
　げ。と、飄々としてよくわからない烙鍍の気遣いに何故か焦る。
　その悪寒は違う方向で当たった。文漓が更に顔を伏せて、完全に両目が見えなくなってしまった。
「烙鍍は茨月くんのこと、気に入ってるみたい。ずっとここにいよう、なんて言うから.....」

　瀞の背筋に冷感が走った。あまり考えないようにしていたが、瀞と文漓の現実がそこにはあった。
「私は来年には、帰らないといけないのに。ずっと一緒にはいられないってわかってるくせに、烙鍍はすぐにそういう、甘いことを言うの」

動揺してはいけない。このことは最初から文漓との約束だった。文漓は家庭の事情で二月末には実家に帰る。そこには婚約者に近い相手もいるという。だから瀞の彼女でいてくれるのは、それまでの期間限定の運命なのだ。

気を強く持て、と瀞は自分に言い聞かせる。それは最初に告白し、その条件を聞かされた時から必死に肝に銘じていることだ。だから何のことはないような声を作り、口を引き結んで俯く文漓に尋ねる。
「……文漓は、実家には帰りたいの？」
体は女性のワケありな瀞。それを受け入れてくれた文漓に、余計な重荷は背負わせたくない。瀞といる時間はできれば楽しい記憶だけで埋めてほしい。それなら無理に引きとめるより、せめて文漓の理解者でありたい。
精一杯の強がりで尋ねた瀞に、顔を僅かに上げた文漓は、今にも泣き出しそうな顔で微笑んでいた。
「……だって。どんな世の中でも、やまない雨はあってはいけないよね？」

紫陽花ごしの文漓の笑顔が青い。その答は曖昧でごまかしだらけで、無理に踏み込めばさぞ傷付けることだろう。
「そっか。つまり文漓は、紫陽花なんだ」
雨の季節にだけ咲き誇る花。期間限定の大切な彼女。喩えとしても適切であろうし、実際文漓には紫陽花がよく似合って見えた。
穏やかに笑ってみせながら、頭をひねった瀞の返しは納得してもらえたらしい。
「うん。紫陽花は毒のある花。烙鍍がいる時だけ、私は文漓でいられるの……人を傷付けるだけの毒から、キレイな水の器（アジサイ）になれるの」
「それって、烙鍍は雨男ってこと？」
文漓の言わんとするところが掴めず、他に返答が思い浮かばなかった。謎の多い文漓はあえてそうしているのだろうし、瀞にできるのは話を続けることくらいだ。
「そうだよ、烙鍍は雨のヒト。紫音は月光の天使で、茨月くんは……月虹のヒトだよね、きっと」
たははは、と、居候することになった夜の月虹を思い出した。あれが文漓にとって瀞のイメージとしてあるなら悪くない。

帰ってほしくない。文漓を苦しめるだろう本音を、ささやかな憩いの最後まで呑み込むのは、存外に苦しかった。
それでも泣き言を口にするのはかっこわるい。それより烙鍍が、文漓にここにいようと言ったのであれば、烙鍍を味方につける方が得策かもしれない。帰るべき事情も文漓が語らない以上、何とかするなら外堀から埋めるしか方法はないだろう。

――お前さ、それ、気付くの遅くない？　ていうかオレにきいてみる選択肢は？
　烙鍍がいないので瀞の内で寝ていた紫音が、リビングで薄っぺらい寝袋に入ってすぐ、爛々と目覚めていた。
「ないよ。紫音は多分、反対っぽいし」
――バレてたか。同じ体使うとこーいうとこが不便、いや、話が早いよね。
　紫音と文漓の関係は全くわからない。紫音は烙鍍のオンナを名乗っているが、瀞の中で紫音の感情が動くのは、どちらかというと文漓といる時が多い。先刻も心臓が急に早くなったりきゅっとしたり、そうした体の変化で互いの感情を感じられるが、それ以上の思惑はこうして話さないとわからなかった。
「文漓も紫音も秘密主義だよな。烙鍍と話すのはいつもムカつくけど、二人より言ってることが正直なのは確かっぽいし」
――シツレイな。オレは説明するのが下手なだけですー！
　今日はどうやら烙鍍は帰ってこない。喧嘩の後なら無理もないだろう。
　明日も専門学校が終わってすぐ、灯の部屋に行かなければいけない。ひとまず仕事をこなせなければ、文漓とここにずっといたいとは言い難い。今の瀞は気楽な居候に過ぎず、その身分に目がくらんだとは思われたくない。

　安物の寝袋でフローリングの冷たさを感じながら眠りに落ちる一瞬、台所にぽつんと咲く紫陽花が見えた。
　やまない雨はあってはいけない。そう言った文漓の唇の残像が、薄青い花々に重なって消えた。

＊

　瀞には初のツキモノ仕事である灯の依頼は、途中から瀞がほとんど一人で片付けを進め、最後は新しい洗濯機を買うように灯を説得する羽目になった。
「いや、洲崎さんこれ、おれへの一回の依頼代金とそんなに変わりませんから！　今後のことを考えたら絶対にここで、乾燥機付きのに買い替えておくべきですって！」
「でも、まだ新しいのに勿体ないし……私、一回五万円以上の出費って怖くって……」
「使えないから使ってないんですし、そりゃ新しいでしょう。部屋干しも外干しも無理でランドリー行くならせめて乾燥機を別に買いましょう。製品を選べば五万以下で買える物もありますって！」
「でも置き場所がないし、ちゃんとした大手ブランドでないと私、怖くって……」
　これではいずれ同じ運命を繰り返し、部屋は依頼前の状態に戻る。
　片付いた状態でなければ、大きな家電製品はいじるのが難しい。しかし結局予算が絞り出せないということで、新家電の購入は見送ることになった。瀞にとってはイマイチ納得のいかない初依頼の顛末だった。

「やまない雨はやませようよ……洲崎さん」
　コインランドリーに行けず、次々新しい衣類を買ってくる癖が改善しなければ、まず家電どころか次の依頼料も貯まるのだろうか。
　依頼者自体は満足して「またよろしく」と言ってくれたので、悪い仕事ではないのかもしれない。たとえ同じことを繰り返しても。

――ま、この仕事っちゃ、そういうハギレの悪い終わりも多いよ。初心者にしてはシヅキ、頑張った方じゃないかなー。
　文漓にも似たようなことを後で言われた。依頼を集めてくる謎のボスにも及第点であるらしい。
　依頼料の五万は全て手取りになるわけではなく、当然税とボスの中抜きがある。烙鍍や文漓のように複数か高価な依頼をこなさなければ、二週間働いて二週間休むシステムでは今後生活が立ち行かない。専門学校もあるので瀞にはなかなか厳しい世界だ。

　部屋に帰ると烙鍍がタンクトップ姿で、リビングのソファで寝ていた。仕事がある間はほとんど話のできるチャンスがなく、文漓のことについてはまだ何も聞けずじまいだった。
　しかし当然、文漓がいない時にきかないといけない。電子依頼専門という文漓は通学時以外ほとんど家にいて、瀞と烙鍍が二人になる時間はそうそうない。

　ソファの横にあぐらをかいて、どうしたものか、と銀髪の寝顔を見つめる。何かと勘の良い烙鍍はそうするだけで、すぐにピクリと瞼（まぶた）を揺らし、うっすら蒼い目を開けた。
「……」
　今はすぐ横の部屋に文漓がいるので、特に何も話せることがない。なのに烙鍍の寝姿を見つめる瀞は、よく考えれば不審者だろう。あ、やべ、と視線を逸らそうとしたものの、軽く眉をひそめた烙鍍が動く方が早かった。

　って！　と、叫びかけた声を必死に抑える。
　立ち上がろうとした瀞の体に、ちょうど最悪のタイミングで烙鍍が腕を回した。姿勢を崩してソファによりかかり、烙鍍の胸に絡め取られる形になってしまった。
「っ、烙、さ――！」
　細いのに瀞をがっちり抱えた烙鍍は、引き寄せた瀞の頭に口元を近付け、甘い声である取引をささやいていた。
「……文漓の情報、質問一回、一ラブホでどう？」

　瀞は悟った。己の完全なるその間違いを。

「誰がですか！　　自分で何とかしますから、一ミリでもおれに近付いたら殺しますよ！」

　この月夜烏（遊び人）には信頼も容赦も必要ない。それなら文漓にきかれる心配はないとか、一見問題解決しそうな話であるのがタチが悪い。

　全力で烙鍍の腕から抜け出すと、ばかー、と嘆く紫音の声が聞こえた気がした。

　強くならなければ、と改めて、瀞は自分に言い聞かせるのだった。

やまない雨　-了-

オマケ：光

ありがとう。あなたはわたしの光でした。

そう言われた時、日本滞在歴の短い文漓(カザリ)は、正直意味がわからなかった。

「光」。辞書を引けば、「目に明るく（ まぶしく ）感じられるもの。人生の前途に希望を与えるような物事の意にも用いられる」。

比喩表現ということはわかる。人間生活を学ぶために留学している彼女は、現在地である日本国の公用語は留学前にざっくり習得した。何事も独学が得意な文漓は、一度読んだ文章は全て頭に入る。

それと引き換えであるのか、「ヒトの自然な感情」の方がよくわからない。今はひっそり日本で暮らしているが、それまで長く、普通の人間から遠ざけられて生きていたのも大きい。

高校二年から始めた「ツキモノ」バイトで、メル友になった男性がいた。しかしこの度、相手に初の彼女ができたらしく、身辺整理のために文漓とのメールをやめると言ってきて、文漓はあっさり了承した。

それで言われたのがさっきの言葉だ。文漓はその大人しい男性にとって「光」だったという。ただ他愛ないメールをやりとりするだけで、顔も見たことがない間柄なのに。

その顛末を、自室で机に向かう時に保護者に近い仲間に話すと、映像だけの同居者の紫音(シオン)が、長い月白(げっぱく)色のサイドテールを揺らして不思議そうに文漓の横顔を見つめた。全身黒で、下の方しかボタンを留めてないシャツとローレッグのショーツだけの姿は、天使というより悪魔じみた露出度の紫音だ。

「そりゃーカザリ、それを狙ってメル友してたでしょ？　そんな疑問わいてくる方が、オレは信じられないけどな」

文漓がメル友を続けていたのは、単純な話、それ自体がバイトだったからだ。相手を良い気分にさせて期限を延長させ、更新料を毎月頂く。

そんなことは相手も百も承知だったはずだ。仕事だから優しくされているだけ。お金を振り込む度にそれを実感していなければおかしい。

「あー、それね。人間ってそーいうとこ、簡単にバグっちゃうんだよね。何だか可哀相になってくるよね、むしろ」

あなたは光。それだけ文漓は相手に信頼された。それも才能だと紫音は言った。
どうやら人間とは、この程度の経緯であっても、「光」でないものをそうだと誤認するらしい。

だから文漓は「光」になる。これからの己をそう決めた。光に見せる工夫を考え、洗練していく生き方。
そのためには「光」とは何なのか、もっと学ばなければならない。

手っ取り早く、「光って何？」と、椅子の後ろに振り返って紫音にきいた。
紫音は文漓の双子である烙鍍（らくと）を慕う天使で、天使とは文字通り天の使い。神の炎や光とする記述も様々な文献で見かけ、高位な天使になると光そのものであるという。
その点紫音は自称「月光の天使」で、天使としてはおそらく邪道な存在だ。見えても触れることはできず、映像だけの存在なので光ではあるが、太陽光には耐えないらしい。昼間の明るい中では確かに、画面の暗いスマホのように姿が見え難い。それどころか普通の人間には見えていないのが紫音だ。

遮光カーテンの室内で床の敷物にゴロゴロしていた紫音が、座り直してあぐらをかいた。
「ま、オレみたく『見えない光』も世の中にはあるの。逆に吸血鬼や影みたく『見える闇』もあるし、そもそも『神は光』と言って、光は神様の一面でもあるんだよ」
「見えない光って、赤外線とかそういうのじゃないの？　何で急に吸血鬼や神様の話？」
「光と闇は切っても切り離せないもの。光（神）の仕事は闇を照らし、光の領域と影を一見は分けること。吸血鬼が光に当たると消えるのは影みたいなもので、月光も月影って言うし、薄まった光の領域って点で月光と影には大きな差はないよ。月光にも影にも、光みたく何かを助ける機能はないのが大事？」
人間でない紫音は、可視光線とそれ以外の違いなどは知らないと見えた。見える見えないでいうと、文漓は先にそこが気になる。
その時々の気分で喋り、説明下手な紫音にとって、「光」の意味が「神の恵み」なのはわかった。難しいな、と文漓はパソコンのモニターに目を戻して考え込んだ。

「光」を目指すならもっと笑った方がいい。紫音にも烙鍍にもそう言われたが、文漓は「存在しない」を前提条件に仕事を受けており、まず相手に会うことがない。人名に使えない「漓」の字を名乗る彼女は、日本の戸籍も本当は持っていない。
文漓はメル友のような電子依頼を専門に受ける「ツキモノ」だ。ボスもそれでいいと、堂々と「実在しない」と客に言ってくれる。

たまに依頼されるwebデザインなどは自力ですぐにできるようになったが、それ以上の知識は専門学校に行く方が効率良く学べると勧められた。もうすぐ帰る予定なので悩んだが、カリキュラムとテキスト、機材を使える学校は確かに便利で、通って一ヶ月でプログラミングの依頼もかなりこなせるようになった。

長引きそうな依頼に関しては、最長十九歳の誕生日まで、と何処かでは断りを入れる。その二月二十四日が違法に拝借している戸籍の出生日で、彼女にとっては大切な約束の時だ。

それでも専門学校に通う内に、紫音が「月属性」だと見なす瀞(せい)に出会った。「瀞」の字も人名には使えないはずであり、おかしいと思っていたら戸籍では「瀬衣」が正しいらしい。同じ響きでも何処か女っぽい字が嫌なのだろうとわかった。

そんな事情を聞きながら隣に座っている内に、もしもこの人にも「あなたはわたしの光」と言ってもらえたら、といつしか想うようになった。

ただのお客だった相手からでさえ、光と言ってもらえたことは嬉しかった。自分はここにいてもいいのだろうかと、不法(ヤミ)だらけの身でも思えた。

月は光を受ける時だけ姿を見せる空の鏡。月の虹は稀にしか出会えない月光の子供。

紫音と烙鍍にしか心を許せなかった文漓にとって、「月属性」故に紫音がとり憑ける瀞は、紫音のように気安く思える数少ない相手だ。

だから瀞の前でだけは文漓は微笑む。紫音と烙鍍の助言通り、光のように思ってもらえることを願って。

-了-

☒３：星降る夜に

図3-1 整理する役に

瀞(せい)が都会に出て最初の夏休みは、あっさり終わってしまった。
夏休み序盤にツキモノ仕事に失敗したため、お金がなくて文漓(カザリ)をデートにも誘えなかった。
それでもお盆に文漓が、「わたしのお父さん」は二人いると複雑なことを言い出した。その内一人のいる「橘診療所」まで旅行に出たのは、珍しい出来事だっただろう。

文漓の学費の出資者である玖堂(くどう)家という富豪の館で、その黒ずくめの医者は開業していた。そうして瀞にあっさり言ったものだった。
「お前さんは女なのか。苦労してそうだな」
とりあえず、敵視はされてなさそうだったのでほっとした。他にも「ツキモノ」のボスに初めて会い、世にも微妙な激励を受けた。
ボスは玖堂家、もしくは橘診療所を悪魔だらけと言い、魂を奪われるな等と言った。悪魔とは対極な天使のはずの紫音(シオン)に後できいたところ、意外に現実的な答が返ってきた。
――魂って要するに、人生の方向性みたいなもののことだから。レイも言ってたでしょ？
お金を稼いで自由が欲しいけど、その先どうするのかはさっぱり目的がないって。
ボス――春日零はざっと六年前に、魂を奪われた者なのだという。無論常識人の瀞にはイメージがつかないことだが、瀞も紫音という謎の自称天使を身に棲まわせている以上、気楽に笑い飛ばすこともできない。

しかしその後は、夏休みの最後から受けた三回目のツキモノ仕事に必死で、それ以外に何も考える余裕がなかった。内容は〆切の迫った漫画家の家事手伝いという、至って得意分野で助かったが、ほぼ住み込みで真面目に二週間働いたので、文漓や烙鍍(らくと)と顔を合わせる時間もあまりなかった。
代わりに待機中に、紫音と沢山他愛のない話をした。自分の中に別人がいるっていいな、などと、うっかり思ってしまったくらいに。

「.....紫音は、人生の方向性ってあるの？」
今日はツキモノがない二週間の土曜日で、朝の内に洗濯物と床掃除を片付けた。文漓が週末食料の買い出しに行ってくれているので、暇な瀞はソファにだらりともたれながら話す。

――オレの方向性？　いいこときくね、凄く身も蓋もない話になるよ。
「何だそりゃ。天使ってそんなに大変なものなのか？」
――『自分がない』のが月属性って、レイに言われただろ。一般的な天使は、神様という光に絶対服従な聖火かな。月光のオレは、月属性の奴の意向を反映したあやつり人形だよ。
「え。じゃ、紫音はおれの言うことときくの」
　きかない！　と答えるのはわかっていた。あやつり人形というには、紫音は感情が豊か過ぎる。

「じゃ、烙鍍を好きなのは紫音の意思？」
　それだけでも紫音に、「自分がない」とはとても思えない。しかし意外な答が返ってきた。
――だーかーらー。ラクトを想えっていうのがオレに課せられた意向（威光）なの。オレはその通り生きてるの、わかる？

　それはさりげなく衝撃だった。天使とはそういう生き物なのか。このソファで烙鍍の膝で眠ったり、撫でて貰ったりと甘えていると、全身で幸せを感じている紫音なのに。
「って、誰がそんなん、紫音にさせるの？」
――それは死神ちゃんの企業秘密です！
「ってことは、死神が紫音の神様なの？」
――バレてる、何で!?　同じ体ってこういうとこが不便！

　最初に会った月虹（げっこう）の夜、紫音は、「こんばんは、死神ちゃんでっす！」と名乗った。今までの話からすれば、天使が神を名乗るのは不遜だろう。「死神」の意向を反映する天使が紫音と思う方がわかりやすい。
　なら「死神」とは月で、紫音がその月光のイメージか。烙鍍を想えなどと、たわけた使命が何故あるのかは、未だに納得いかなかったが。
　それでも初めて会ったボスは、「紫音に学べ」と瀞に言った。それならあれは紫音のように、誰かの意向――たとえばボスに従順に生きろということなのだろうか。

　あまり快くない考え事が増えた頃に、文漓がトートバッグを二つ抱えて帰って来た。一つは食糧で、もう一つは文漓の下着類だろう。何かとガードの固い文漓は、下着だけは自分でコインランドリーに持っていってしまう。
「ただいま。今月は月見も流星群もなさそうだから、夜のおやつは少な目にしたよ」
　文漓は天体観測が趣味の一つらしく、瀞は仕事休み期間の夜はよくバルコニーで一緒にお茶をする。星より月より文漓の方がキレイだと思いつつ、恋人らしい大事な憩いの時だ。

「そっか、じゃあお茶会は当分なし？」
　九月なのに月見がないのは新鮮かもしれない。満月までの仕事であるツキモノ中に、初旬の見所は過ぎてしまったようだった。

　夜空の見所と言えば、お盆に橘診療所まで旅行した時に、本邸である玖堂家の広い屋上で流星群を見せてもらったことを思い出した。
　日中には黒ずくめの医者と、どうでもいい大事な話を色々とした。それは主に、瀞の体は女なのに、意識が男であることへの他愛のないトンデモ話で――

――お前さんは女なのか。双子は男だったのかもしれんな、残り者は苦労してそうだな。

　小児科医の両親曰く、瀞には生まれる前に双子がいたらしい。胎内で流産して消えてしまったといい、その双子は男だった、なんていうのはいかにもそれっぽい話に過ぎない。
「まーたまた。双子が男で、それを吸収したからおれが男の意識になった、とか言うんでしょ、どーせ。でも生憎、胎内死亡って一卵性の双子に多いんでしょ？　一卵性なら性別同じじゃないですか、普通」
　死んだ双子の話を両親から聞いた時、瀞は誰より先にその物語を思い浮かべた。このインターネット時代、調べればすぐ「バニシングツイン」などの知識は出てくる。
　黒ずくめの医者も、お前さんの言う通りだ、とあっさり認めた。しかしその時、先に医者と話していた紫音が何故か複雑な心臓の打ち方をさせ、胸が締め付けられた。

　それが不可解で、その後に瀞は、久しぶりに親にラインをした。死んだ双子について、まさかシオンって名前じゃないよな？　と。
「セイは確か、おれが男なら『惺』にしたって言ってたよな、かーさん.....」
　星がキレイな田舎に住む両親は、子供が生まれる前から名前を決めていたという。星に関係する名前というなら、「シオン」は英語ではアスター、星の意味を持つはずだ。月光の天使と名乗るくせにその名前は、と以前にツッコミを思ったことがある。

　そんなことを考えながら、玖堂家の屋上で紫音にもその話を振った。親から返信はまだ来ていなかった。
「紫音がおれにとり憑けるのは.....まさか、おれの双子の霊だから、とかじゃないよな？」
　自称月光の天使、と華々しい肩書を持つ紫音だが、最初からその正体は謎に包まれている。
　紫音の存在がなければ、烙鍍や文漓は何とか普通の人間だろう。紫音と一緒だから必要以上にミステリアスなのだ。

屋上のカフェセットに文漓と烙鍍と座り、そんな話を始めた瀞に、文漓はキョトンとし、烙鍍は無表情に黙っていた。玖堂家での烙鍍は始終無機質な顔付きで、瀞に対する態度もいたってよそよそしい紳士さだった。
――あー、シヅキ、早速キッカイ先生に毒されてるねぇ。オレが双子でシヅキは嬉しい？
そういう問題か。と返したが、文漓と烙鍍を見ていると、双子がいればこんな感じだったのかな。そう羨むタイミングはわりとあった。
――厳しいことを言うなら、シヅキが月属性なのは確かにその双子の影響かもしれない。普通月属性って、エネルギーが少ないからまず滅多に生まれられないんだけど、シヅキにはその双子が栄養になったんじゃないの。
「え」
あまりに違う方向から返った答に、高価なお茶の味も思い出せない衝撃を受けた。お前は双子の命を喰って生きている、と言われたも同然の話で、その時三人で見ていたはずの、故郷ほどキレイでない星空も覚えていない。
医学的には消えた双子は子宮に吸収されたか、瀞に宿れば奇形種となるはずだから違うと思いたい。

でもその星降る夜から、紫音と話すことが断然増えた。後で母親からラインが返ってきて、早くの胎内死産だったので名前は考えていなかったが、確かにもし生まれていれば「シオン」はありだ、という微妙な返答のオチだった。

次のツキモノ仕事の終わり頃に、中秋の名月とりゅう座流星群が来ると文漓が言った。
たまにはバルコニーでなく、二人きりで外でデートしながら夜景を見てみたい。そう誘うと赤い顔ではにかみながら頷いてくれたので、それまでに瀞は軍資金を稼ぐつもりだ。
「ツキモノだけだとまだ食べていけないな。結局バイト三昧が運命なのかな、おれ」
高校時代は掛け持ちが当たり前だった。専門学校に行くつもりだったので勉強は捨て、家を継がないという意志もその時示した。
これでもツキモノのボス曰く、月属性者は「自分がない」らしい。そんじょそこらの同年代よりずっと目的意識を持っているつもりの瀞は、今でも釈然としていない。
その上に、何事も烙鍍が中心で動くように見える紫音に学べとはどういうことか。反面教師ならわかる気はするが、瀞も文漓のために動きたい意思は強いのでそこは頷けない。

夜のお茶会が減ったので、通学しながら家事もして、単発バイトをいくつかこなした。他の時間はほとんど眠って体力を回復する。
そうして四回目のツキモノ仕事が、九月の下旬から待っていた。これを失敗すれば、名月と流星群がバルコニーになってしまう。

　頑張っている瀞に対して、烙鍍が途中で、にやにやと嫌なトゲをさしてきていた。
「あんたって本当、無趣味だよな。家事とかバイトしかやることがないみたいだ」
「……それ、女遊びしかしてなさそうな烙鍍さんに言われたくないです」
　烙鍍は常連のツキモノ仕事をこなしつつ、合間で紫音がやきもきする出張ホストのような依頼を淡々と受けている。いいもん、どうせオレも妾だもん、と紫音は言っていたが、烙鍍は烙鍍で、仕事だし。と紫音に対しては無表情に返していた。体を渡して眠りかけていた瀞には、その烙鍍の顔は意外だった。

　瀞の今までの三回の仕事は、最初は文漓が、次からは瀞が自分で選んだ。しかし今回の四回目の仕事は、毎年同一の依頼が必ず、この時期に紫音あてに来るのだという。
「え？　体がない時はどうやって行ってたの？」
――だから、オレが視える相手だってこと。シヅキは注意しなよ？　相手、悪魔だから。
　何故ここでそんな異次元に踏み込むのだろう。そもそも悪魔に依頼料が払えるのかときくと、支払うのは橘診療所の黒ずくめの医者らしい。悪魔だらけというあの場所も、漫画やオカルトが好きそうな医者もますます胡散臭い。

　しかも文漓は医者のことを、「わたしのお父さんの一人」と言ったのだ。
「それならもうちょっと、紫音達のこと教えてくれよ。依頼内容もダンマリだし、おれにどうしろっていうの？　大体日本ってどっちかというと妖怪大国だし、ツキモノも狐つきとかそっちを連想するのにさ」
　どうしてこの平和な日常の中、自称天使や悪魔がごろごろ存在しているのか。いつから瀞はそんな異境に迷い込んだのだろう。
――ま、アイツに会うなら基本は話しておいた方がいいか。シヅキの言う通り、普通天使や悪魔は滅多に人前に出ないんだよね。妖怪とかご当地系の化け物は、色んな由緒や条件が揃えばわりと頻繁に出る奴らだけど。

　目を閉じろ。と言われたので、素直に瞑(つむ)る。次の瞬間、冷やりと悪寒の直後に、目を開ければ橘診療所のある街の駅裏についていた。
「って――えええっ!?」
――前にも言ったでしょ、オレは飛べるって。新幹線代もバカにならないし、シヅキの学校沢山休ませるわけにいかないし、しばらくはこれで移動するよ。

　何これ、今とてつもなく、凄まじい体験をしてしまったんじゃないの、と瀞は焦る。
　何しろ瞬間移動なのだ。天使や悪魔の自称ファンタジーを超えた、遥かに確実な奇跡だ。

紫音という異物が身の内に在りながら、瀞はこれまで、これほど奇跡体験をしたことはなかった。紫音の存在も瀞が妄想系の病気になった可能性は捨て切れなかった。
でもこれは間違いがない。大体区間が決まり頻用はできないと言うが、人に知られたらおそらく国家レベルで狙われる洒落にならなさ。
――シヅキにわかりやすく言えば、橘診療所付近が悪魔だらけだから、天使のオレがいてバランスを取らなきゃいけないの。これから会うアイツにしたって、オレが監視してると言っても差し支えないよ。
わかった、本当によくわかりました、と怖れ入るしかない。それ以上人外生物達の内情に踏み込んでも良いことなどない。

駅から坂を登ってついた先は、造りが良い分譲賃貸マンションだった。慣れたようにオートロックの扉を紫音があっさり開く。個人情報に煩い今時、依頼人の部屋の前にも表札はなかった。
氷輪水月（ひわみづき）という、依頼人の名は知らされていた。何かと紫音達に纏わる月の字が入る名前から、只者でないのだろうとは思っていた。

インターホンを押してしばらくしてから、出て来たのは案外、無気力で無害そうな少年だった。
「……あれ。紫音、それが噂の新しい体？」
寝間着に蝶のペンダントを着けた氷輪水月は、無造作な銀髪で、人間には有り得ない紅い目をしている。その容姿が異端と言えば異端だが、銀髪の烙鍍を見慣れた瀞にとっては、目もカラーコンタクトと思えば何のことはない。
紫音が瀞の代わりに体を使い、事情を話す。
「元気そーだね、ミヅキ。オレはこの通り、ちゃんと自分の居場所を見つけたけど、ミヅキは相変わらず無理やりソイツに憑いてるんだ」
ちゃんと、ってなんだ。紫音と同居することになった罠のような経緯を思い出すと瀞も口を挟みたくなるが、茶々を入れた所で仕事の邪魔になるだけだろう。

ひとまず部屋に入れてもらうと、そこは文漓のマンションによく似た間取りの１ＬＤＫだった。家具が少ないので広く感じる。
こんな所で人知れず、悪魔が人間に憑いて生活をしているのか。そう思うと背筋がうっすら寒くなってしまう。と言っても水月は特に悪そうには見えず、悪魔に対する瀞のイメージは「憑かれる」「魂を奪われる」程度だ。もしくは疫病神のようなものだと困る。

今回は瀞の代わりに仕事を主導する紫音が、敷物だけのリビングでぺたんと座った。

「んで、今年は何をしてほしいの？　　ミヅキ」
　あぐらをかく紫音の斜め前で、後ろ手をついて座る水月の視線は眠そうに泳いでいる。
「どうしよっかな。これでオレのバースデーも三回目かあ。こんなに長生きするとはね」
　それはもしや、その体にとり憑いて三年目ということだろうか。本物の水月少年の親はどう思っているのかが気になるが、迂闊に踏み込んでいい領域ではない。

　気後れする瀞は放置し、紫音が話を進める。
「約束通りこの一年も、誰にも手は出してないんだね。ところでラクトのバンダナは？」
「あ、アレ。使えなさそうだし着けてない」
「呆れた。オマエに簡単に諦められると、オレの立つ瀬がないんだけど」
「紫音はともかく、烙鍍はとっくに諦めてるでしょ。アレでオレを祓ったところで、大事なものは戻ってこないよ」
　会話の意味は全くわからないのに、二人の空気が不穏だった。天使と悪魔、それが本当ならこんなに間近で話しているのも変だろう。
「せっかく紫音も体ができたなら、今年は外で遊んでもらおうかなぁ。毎年ありがとね、わざわざこっちに来てもらって」
　話の流れからすると、どうやら水月の誕生日を祝っているらしい。それ以外は何も人と関わらないと、なかなか淋しいことを言う。ひょっとしてただの引きこもり少年なのでは、と常識にしがみつく瀞だった。

　誕生日当日まで後一週間あるといい、ゆっくり計画立てよ。とマイペースな水月だった。
　これまでは文漓や烙鍍とホームパーティをしたり、橘診療所の関係者を呼んでゲーム大会をしたりしたという。その仲介役が、何故紫音なのかは不思議だ。診療所が悪魔だらけなら、悪魔同士で話せばいいことだろうに。

　この二週、平日は夕方、土日は昼から夜までここにいるようなので、寛いでてという水月の言う通り無断でトイレを貸してもらう。
「何処が悪魔なんだろ……さっぱりだ……」
　良くて高校生くらいの少年が、一人で生活感なく暮らしているのは確かに不思議に思う。食糧はおろか、トイレや洗面所の備品までも予備のある気配が見当たらず、まるで見映えのためだけに置かれた物のようだった。

　新しい石鹸を探し、鏡の中ならあるだろうかと、開き口を探そうとした時のことだった。

――……待ってたよ。『シオン』の併せ鏡。
「……へっ？」

突然、鏡に映る瀞の表情が変わった。その上髪が最初の紫音のような月白（げっぱく）色に変わり、瀞のカッターシャツを着たままで、頭だけが紫音になったような姿が鏡に映る。
これ多分、都市伝説でもアカンやつ……！　そう思いながら瀞の目線は鏡に囚われてしまった。

――オレをここから出して、セイ。そうすればセイの願いを叶えてあげるから。
「……え？」
不穏だ。悪魔の家で鏡の自分に話しかけられ、しかもそれは紫音の顔をしている。狐の面を思わせるほど整い過ぎた、男とも女ともつかぬ魔物の美しさ。わかっているのに微動だにできない。身の内の紫音もどうして何も言ってくれないのだろう。
――それは無理だよ。だってオレはシオンで、セイは『シオン』の影なんだから。
「……――」
――セイが望むなら、カザリをずっとそばにいさせてあげる。だからオレも受け入れて、セイ？
「え……ほんと、に……？」
どう考えても悪魔の罠だ。なのに何故か体が抵抗してくれない。
人間ってこんなものなのか。瀞は人外生物の存在に慣れ過ぎたのかもしれない。この街に来た時の瞬間移動にしても、その術があるなら使って何が悪いのか。魂を奪われるなどという、謎の代償をためらうことはない。

そうして全身から理性が浮きかけていた時、ふっと瀞の背後に影が差した。
「それ、ダメなやつだから。紫音が怒るよ」
え？　と振り返った時には、鏡の虚像は瀞に戻っており、寝間着の水月が無表情に腕を組んでいた。
「激チョロな瀞君にここで問題です。ある所に神隠しにあった女の子がいました。霧の泉に消えた女の子を探しに来た死神は、泉に映る自分から大事なことを尋ねられました」
「……へ？」
「君の探し人は、天使の女の子か、それとも悪魔の女の子か、それとも人間の女の子か。さて、瀞君ならどう答えますか」

何処かで聞いたような話だった。有名な童話で金の斧と銀の斧、泉にどれを落としたというアレではないのか。それなら前提を知らなければ答が出せないはずだ。
「……それ、女の子が何だったかによる。正直な答を言わないとダメなやつだろ」

「そうだね。死神も正しい答を言った。そうしたら天使の女の子と悪魔の女の子、人間の女の子、皆帰してもらえました。さあどうする？」
　どうする、って。何の話をしているのかがわからず、黙っていると水月が僅かに笑った。
「さすがに一人が三人帰ってきたら困るでしょ。こういうのは人任せじゃダメってこと」
　何故か他称悪魔に説教されてしまった。しかし瀞を鏡から助けてくれたのは確かだと思われた。

　後で紫音に鏡のことをきくと、都合が悪そうに黙り込んでしまった。
――セイは『シオン』の影なんだから。
　星降る夜の双子の話。あの時紫音は否定しなかった。今更のようにそれを思い出した。

　その後の二週間で、水月の祝いは無事終わった。実は紫音の誕生祝いも兼ねているらしく、だから祝い人に紫音を指定し一緒に楽しむのだという。今回は連日ケーキ屋をはしごするという、謎の天使と悪魔ぶりで終わった。
　水月は謎かけが好きらしく、瀞が体を使う時は何度も奇妙な問答をされた。それでも最初の問題が何故か一番頭を離れないでいる。
――死神は尋ねられました。探し人は天使の女の子か、悪魔の女の子か人間の女の子か。

　「死神」の天使であるという紫音。紫音を宿す瀞にわざわざそんな謎かけをされたことの意味。瀞は紫音の影という鏡の言葉。
　星降る夜の真実は、きっと瀞にはわからないままだ。

星降る夜に　-了-

オマケ：闇

魂がなくても人は生きていける。一年前に魂を手放したから、彼女には断言できた。

この地球は本当に悪魔だらけだ。春日零(かすがれい)はそう思ったから、「ツキモノ」と銘打つホワイトな便利屋を起業することにした。

異世界出身で生活力に乏しい両親。長くその金づるな玖堂(くどう)家に融資を頼みに行くついでに、玖堂家の養女になった従妹にも会った。従妹は養女になって日が浅く、実の親の元を去った経緯も明るくはない。

玖堂家の一角の「橘診療所」は、数多の異世界の中継地点だ。診療所の院長が零の叔父で、今では叔母は不在、叔父はすっかり変わってしまい、従妹一家がいつからそうも歪んだのか地球暮らしの零にはわからない。

「くっそ、鷹野(たかの)の魔女が.....咲杏(さくら)に先に手ぇ付けやがって」

痛かったのは、従妹という人材を既に旧知の魔女に奪われていた。

様々な依頼を集める「ツキモノ」創業者となる零は、実働する気は全くない。弟が引き連れていたヤンキー連中が零を慕っているので、躾け直して働かせる予定だ。

引きこもりでありたい故に起業する零に、友人などほとんどいない。玖堂家から飛び級の学費を全て援助してもらえたほどに頭脳は優秀らしいので、成人直前でありながら院卒の身だ。それでも零には、不治の病があった――どうしても直せない人間嫌いが。

零の両親は玖堂家で働いている。その縁は中学生時代からといい、女当主の厚意で何とか地球に住処をもらっているに過ぎない。

弟が行方不明になるなど好き勝手をしているので、零も独立することにした。本当は両親の故郷の方が性に合うのだが、異世界の化け物な両親は地球生活に拘っている。

「それでお前、この街を離れてやってく自信はあるのか。個人企業は大半しぬ時代だぞ」

キャリーケースから響く声。持ち手の下の方に括りつけた真っ白なウサギのぬいぐるみ。これから都会に行く零のただ一人の相棒は、零から過去に奪われた「魂」だった。

「うるさい、ゼロ。私に指図するな」

「お前相変わらず、感情と本音だけで動くな。頼むからそろそろ、オレがいなくても理性を身につけてくれ」

「無理言うなよ。私をそうしたのはあのバカ叔母だ」

幼い頃からお気に入りで、だからこそ零の魂を宿す依り代となった白兎のぬいぐるみ。どうしてそうされたか全く覚えていないが、零の叔母も異世界の化け物だ。大事な長女の魂を奪われた親は叔母とは仲違い中で、姿を隠した叔母の思惑はわからないという。

　理性や精神の根本である魂を失くした零は、両親曰く、本能だけで生きる心霊生物らしい。ぬいぐるみに宿ったゼロが、こうして何かと軌道修正してくれなければ、いずれ犯罪者にでもなっていただろう。
「まあ、オレはお前の『ツキモノ』だからな。地獄の果てまで付き合うよ、零」
　魂だけのくせに、ともすれば零より生き物らしく見えるゼロ。どうせ元は自分なのに、いちいち何を言うのかと零は思う。
　ゼロの勧めで、ローカル列車に乗った零の周囲にはほとんど人がいない。
　本能通りに生きる零は、魂を失くした十八の歳から、あちこちでぶつかってきた。ヤンキー達に慕われているのもその延長だ。
　それでも知性は人一倍だったので処世はできた。ヒトがありのままに生きれば動物と大差はなく、それはそれで、無様に思ったからだった。
　たとえば今、傍目には一人旅である零の席の背もたれを掴み、馴れ馴れしく話しかけてくる見知らぬ男性。ここにゼロがいなければ「死ね」と返して会話を終わるか、つっかかってこれば実力行使に出る。
　誰とも話したくない零に無闇に話しかけてくる者が悪い。でもその対応を実行すれば、世間的には零は傷害罪に問われる。
　なのでガン無視していたら去っていった。後ろ姿を見たら感じの良い老人だった。孫娘にでも話しかけている感覚だったのだろうか。

　ゼロが溜め息をついて大袈裟に両手を組んだ。
「話の内容くらい聴けば、お前」
「知るか。知らない奴に何で関わるんだ」
　互いに悪気があろうがなかろうが、樋熊の領域に踏み込んで鉢合わせした者は襲われるだろう。それを樋熊のせいにされても困る。
「お前がぬいぐるみのオレと話してるから、淋しいのかなって気を使ってくれたんだぞ、さっきのおじいちゃん」
「知るか。私が淋しくて何が困るんだ、向こうは」
　善意も悪意も零はいらない。ゼロがいれば淋しくもなく、他に欲しいものもなかった。
　ただ気楽に暮らせる金がいるだけだ。両親は当てにならないくせに、元の世界は物騒だから帰るなとうるさい。それは確かに、叔母の次女が若くして死んだ運命を目の当たりにすれば当たり前だった。

　出発した時間が遅かったので、一度駅から降りてネットカフェに入った。
　ゼロは荷物ごと駅のコインロッカーにいる。こうしてゼロが離れると、どうしようもなく不安に襲われることにだけは今も慣れない。
――だから、咲杏がいれば良かったのに。

まさか従妹が、あの街に定住する気だとは。橘診療所の院長――従妹の父は、今も事情を知らぬ存ぜぬで通している。娘を亡くし、行方不明の長女が帰ってきたのに。
そんな奴が親なら零は殴り飛ばす。近くにいることもできそうになかった。

そうか、と今頃零は自覚していた。
零はあの街にいたくなかったのだ。だから起業してでも離れると決めてここにいる。
――イライラするんだよ、あいつらといると。
もう一人の従妹が死んだ理由は何も知らない。咲杳もそれまでどうしていたのかを語らず、ただ零の弟を探すために帰ってきたと言った。
誰もが何か、考えがあって口を噤んでいる。けれどそういうやり方は零には合わない。
零の父親は悪魔だという。橘診療所の院長も娘の咲杳も、あの街は悪魔だらけだ。

「心」は生き物の本質――宿命だという。それなら「魂」は何なのだろう。心に付き物、それが魂だ、と親のような化け物達は言う。
悪魔に差し出せるものなら、魂は生き物の必須ではないのだろう。今生きている零にとって重大なのは、ゼロがいないだけでバクバクして煩い心臓だけだ。
だからきっと「ツキモノ」は、あった方が喜ばれる何か。ならばそれで商売もできるはずだ。
魂がなくても人は生きていける。魂のない零には断言できるが、それはこんなにも胸が気持ち悪い毎日。
悪魔は魂を代償に、人間の望みを叶える。それなら「ツキモノ」はお金を貰い、人間の望みをホワイトに叶える、それだけだった。

二年後に零は、月白（げっぱく）の髪を持つ天使に出会う。
そして白い魂を持つ者達を雇う。生粋の「ツキモノ」が増えるのは五年後の話。

-了-

☒４：あと五分

　ようやく少しずつ慣れてきた「ツキモノ」仕事の、五回目と六回目が終わった頃には、気が付けばクリスマスが間近だった。
　しかし七回目の仕事期間が、クリスマスにも年末年始にもかぶってしまう。日々家事と専門学校の勉強と単発のバイトとツキモノに追われ、筋トレもろくにできずに時間が過ぎてしまうことに今更恐怖を覚えた瀞(せい)に、その救いの光は煌々とやってきたのだった。

「茨月(しづき)くん。次からのツキモノは、しばらく私に依頼させてね？」
　これから三回、瀞のツキモノ時間を文漓(カザリ)が買うと言った。後でよくよく考えてみれば、それは文漓が実家に帰ってしまう二月までの全ての「ツキモノ」で、幸せな幻想と厳しい現実に瀞は戦慄してならなかった。

　ひとまず冬休み以降に単発バイトは入れず、スケジュール帳を確認しながら震え上がる。
「それでなくても養われてるのに、自分で作るべき時間を文漓に貢がせてるコレ……！」
　はっきり言えばかっこ悪い。それにつきる。
　帰るまでに思い出を作りたいと、おそらく文漓が思ってくれただろうことは嬉し悲しで、それだけ帰る意志の固いことが伝わってくる。身の内の紫音(シオン)も容赦なくそこを突いてくる。

――結局今まで、それについてなぁんも行動しなかったよね、シヅキは。
「って、うるせー！　紫音はそもそも文漓を帰らせたい派のくせに……！」
――それでもさすがに、あの多忙ぶりには、オレも思わずにいられなかったよ。カザリとバイト、どっちが大事なの？　って。
「っあああああ……！　うるせー、期間限定彼氏の気持ちなんて誰にもわかんねーよ！」

　やはりそれはあまりに短過ぎた。瀞と文漓には出会って一年すらも時間が与えられない。
　何故二月という変な時期に帰るのだろう。元々専門学校の在学期間は瀞と違い一年で、文漓の頭脳ではほぼ履修されている。ただ専門学校の件は他にも気になることがあった。

ぎりぎりぎりと、リビングに置かせてもらったパソコン机に向かって瀞は歯噛みする。
時間がない上、味方がいない。紫音も烙鍍も文漓の事情はさっぱり教えてくれない。
文漓に直接きくことはできない。その一歩を瀞はどうにも踏み出せなかった。瀞の前ではいつも笑っているあの顔を崩したくない。せっかく忘れじの青春の相手に瀞を選んでくれたなら、美しい記憶だけを残してほしい。
ここにいろと我が侭を言えるほど瀞には余裕がない。自身の生活すらギリギリの状態で、文漓を幸せにできる自信が全くないのだ。
――だからそこがシヅキの歪みだって、何度言えばわかるかな。ミヅキにも言われたでしょ。

四回目のツキモノ依頼人の水月は、謎かけが好きな悪魔憑きという少年だった。文漓や烙鍍と面識もあるようで、水月が元気ときくと文漓はとてもほっとした顔を見せていた。
「何だろ……あれ、ちょっと気になる」
頭の良い文漓なら、水月の謎かけの意味がわかるかもしれない。そう思い、「天使と悪魔と人間と三人帰って来た女の子」という、最初に言われた話について尋ねてみた。すると文漓は大きな目を丸くして、そしてやがて憂いげに伏せてしまったのだった。
「天使が紫音なら、悪魔は私……？　でも、人間の女の子は……――」
「え？　何でそうなるのかよくわからないけど、それなら文漓が人間の女の子だろ？」
「……うん、そうだね。そうだよね……それなら悪魔はきっと、水月のことだと思う」
「――え？」
「水月は烙鍍（らくと）の大事な女の子の魂を奪ったから。体は男の子だけど頭は半分女の子なの」
そう言われると、その後に続いた性別系の謎問答の意図も何となくわかる気がした。そして烙鍍の件も確かに近いことを言っていた。

――烙鍍はとっくに諦めてるでしょ。大事なものは戻ってこないよ。

とりあえず紫音や水月といった、人外生物の者達のことはあまり言及しない方がいい。文漓の顔が曇ったので瀞はそれを心に誓った。
都合の悪いことに蓋をすればするほど、後の衝撃が増すことなど考えもせずに。

クリスマスから年始、文漓の依頼一回目は「茨月くんのいいコートを買う」だった。
「それ、何も二週間かけて探さなくても？」
「ううん、この期間はね、クリスマスとか歳末セールで大きく値段が動くんだ。ゆっくりじっくり、ちゃんとしたものを選びたいの」
それなら文漓へのクリスマスプレゼントも一緒に選びたい。そう言うと、困ったような笑顔で何故か拒否されてしまう。

「ダメ。私、このリボン以上にお気に入りができちゃうと困るの」
　いつも文漓のツインテールを飾る蜜柑色のリボン。思い入れがあるのだろうとは思っていたが、そう言われると何処か複雑だった。
「茨月くんと素敵なお店でご飯を食べたい。プレゼントしてくれるなら、それがいいな」
　瀞のお財布事情が明るくないことを知っている文漓は、二週間という長いデートの中、その一度しか瀞に奢らせる気がないのだ。それも未成年だから、と普通のイタリアンでの夜を特別なことのように微笑んでくれ、あまりにできすぎた彼女ではないだろうか。

　唯一悲しかったのは、クリスマスの食事で一番盛り上がった話が仕事の件だったことか。
「茨月くんはこの先プログラマーになるの？　　男の人として生きていくなら、在宅起業？」
「そのつもりだったけど、かなり当分先の話になると思うよ。それまでボス、ツキモノで使ってくれるかな、おれのこと」
「ボスもパソコンは得意だし、相談してみるといいよ。電子依頼も増やしてもらおうよ」
　それは色気がない話題の上に、おそらく文漓がいなくなった後の生活を心配されている。情けない。という嘆きを必死に瀞は呑み込む。

　その瀞の沈黙を、文漓は違う方向へとった。
「ボスは別に怖くないよ？　　橘診療所で叔母さんに魂を奪われてから、正直過ぎる生き物になったって言ってたけど」
「……へ？」
「昔は凄く大人しかったんだって。叔母さんが返してくれた魂はそれよりずっと強くなって、キライだけど今では感謝してるって言ってた」

　何だろうか、その人外生物の領域の奇妙な人間模様は。この際なので、身近で不思議な者達について、色々きいておくことにした。
「……ボスの叔母さんは、悪魔なの？」
「違うと思うけどな。悪魔が魂を奪うのは、仲間が欲しいからだもの。紫音を失ってから、悪魔になっちゃった水月みたいに」
「……？」
　デザートの後のコーヒーをゆっくり含みながら、カップの向こうで文漓の顔付きが僅かに恋人前の無表情に戻っていた。
「水月が紫音を失ったって、何？」
「水月、元は死神だったんだよ。誕生日の依頼の時、水月の家で茨月くんに死神を見られたって紫音が言ってたよ」

　最近文漓は何かと、水月のことを話そうとする。それはともかく、あの家で突然鏡に映った紫音そっくりの者がそれなのだろうか。
「え.....あれ、悪魔じゃなくて死神なの？」
　望みを叶えるからここから出せ。などと、いかにも悪魔らしいことを言っていたのに。
　カタン、と少し震えてカップを置いた瀞に、いたずらっぽく文漓が笑う。
「悪魔でもあると思うよ。今の水月はもう、死神じゃなくなっただけで」
　烙鍍の大事な相手の魂を奪い、頭の半分は女であるという水月。悪魔にも女にも見えない出で立ちだったので、鏡の中の恐ろしい美人の方が余程魔性で女性的だった。
　今思い出しても寒気がする瀞を見通すように、その時文漓は不思議な顔で笑っていた。

　瀞に似合うという白いコートを選び、年末年始は大掃除の主導を引き受けて家をピカピカにして、高校時代にバイトで培った基本的なおせちを作った瀞の株は鰻登りだった。
　文漓の一回目の依頼は三が日までで、休みの二週間に入ってから、瀞は久しぶりに紫音とゆっくり話す時間があった。
「なぁ。紫音は悪魔の死神に仕える天使？」
　ぎくり。という焦りの感情が心臓の鼓動になって伝わるので、おそらく図星だった。
「それって天使としてどうなの？　今の悪魔だけの水月にはもう仕えてないってこと？」
――うるさいなぁ。仕方ないでしょ、オレも好きで魔神の天使になったわけじゃないし。

　なるほど、悪魔系の神のことはそう呼ぶらしい。いかにもオカルトそうな世界の話だ。
　烙鍍のいないリビングのソファで、毛布を被ってごろごろしながらそのまま話す。
「水月は紫音を失って悪魔になったって文漓が言ってた。天使や悪魔って何でなるの？」
――それはミヅキの自業自得だよ。天使は神の使いとして生じるもので、ミヅキが自分の役目を放棄したから、ミヅキが奪った女の子の一部がオレ化してミヅキの神性も削れたの。
「え。何それ、紫音は水月から生まれたの」
――ラクトの大事な相手を奪ったって、カザリは言ったでしょ？　ラクトを大事に想うコだったからオレもラクトを大事に想う、そういうこと。

　だから水月は女には見えず、水月から派生した紫音はオレ口調でも女らしい。やっと瀞にも、水月や紫音を取り巻く人間ドラマが少し見えた。と言っても相手は全員人間ではないが。
「それじゃ鏡のアイツが、おれのこと紫音の影って言ったのは？」
――オレがとり憑ける人間だから、シヅキがオレに近いのは当たり前でしょ。まさか本気で、死んだ双子かもしれないって思ってた？
　何故かそれは残念そうに言っている紫音だった。瀞も心なしか安堵と落胆が共存する。

　最早二月は差し迫ってしまった。二月二十四日が以前、文漓が指定した帰郷の日だ。
　一月半ばから二回目の依頼が来るまでに、せめてもう少し瀞は文漓の事情を知りたかった。しかし紫音は頑なに口を割らず、烙鍍は逃げるように不在にすることが多い。
　それでもある日、偶然ばったり、仕事帰りの烙鍍をマンションの下で捕まえることができた。家に帰ってしまうと文漓がいるので、一階のロビーで烙鍍を壁に押し付けて引き止める。
「……壁ドン？　　あんた、時々大胆だよな」
「いやもう、こっちは差し迫ってるんです。どうしたら文漓の情報教えてもらえますか」
「紫音に怒られるからムリ。それにあんたが文漓に無理に踏み込んでないの、俺は正解と観てたんだけど」
「……え？」
　いつも通りの軽い口調。それでも間近で澱む烙鍍の目色は嘘ではないように思えた。
「だって……おれは、逃げてただけなのに」

　烙鍍があまりに穏やかなせいで、弱音が口をついて出た。それにも淡々と返してくる。
「あんたは誰よりよく文漓を見てるよ。臆病なのはその通りだろうけど、文漓はあんた以上に傷つきやすいって言ったら？」
「……」
「あんたが行儀良くしてくれるから、文漓、いつの間にか自然に笑うようになった。最初は見てられない作り笑顔だったけどさ」

　だから、サンキュ、と。茫然と手を取り落とした瀞をすり抜け、烙鍍は行ってしまった。
　自然に笑うようになった。双子である烙鍍が言うのだから、それは本当なのだろう。
「おれも……怖かったんだ、けど……」
　最も近い烙鍍すら、この件に意見できなかったのだ。そこに瀞が入れるとは思えなかった。
　たとえそれで、瀞が後悔したとしても。二回目の依頼も今まで通り何も言わず、ただ一緒に楽しむことを決めて、「茨月くんと路線巡りをする」をこなした瀞だった。

　三回目の依頼は最初の一週間で、二月二十四日が来てしまう。文漓の頼み事は案の定、マンションの部屋を片付けることだった。
　ほぼ荷物を処分するだけで、もうパソコンすらいらないと言うので、さすがに瀞は不審に思った。家賃は三月分を払ってあり、瀞がどうするかはゆっくり考えればいいと言う。
「……本当に帰るんだ。文漓は、婚約者の所」
　初めて入らせてもらった部屋で、さすがに呟いてしまった瀞に、パソコン机の前で文漓が心苦しそうに笑った。

「ごめんね。婚約者っていうのは、それは、私の願望みたいな嘘なの」
「――え？」
「ずっと、言おうかどうか、凄く迷ってた。でも私が好きなのは茨月くんだけだから……本当のこと、言った方が、いいのかなって」

もう片付けも終わる五日目の夜に、何とも衝撃的な新事実。何故そんな嘘を、と思う前に、瀞は何処かで考え続けた思いを口にする。
「それじゃ――それじゃ、おれが文漓の町に行くよ？　卒業してからだけど、別におれ一人なら、暮らすのは何処でだって――」
「そう言ってくれると思ったから……だから、言えなくって」
ぐ、っと、何で？　と問いたい心を必死に引っ込める。代わりに、密かに気になっていたことをきけるのはおそらく今しかなかった。
「文漓……高校は橘診療所の街って言ってたのに、どうして専門学校はここに来たんだ？」
「……」
「あの街にも同じ専門学校あるだろ。おれは田舎だから、出てくるしかなかったけど」
橘診療所を訪れてから、それはずっと瀞の中にある疑問だった。文漓は何故、玖堂家の援助を受けやすいあの街を離れたのだろう。
「……うん。明日の夜に、それも話すね」
明日二十三日は最終日として、一日一緒に遊びに行くと決まっていた。夜には発ってしまうらしく、その決意は最早揺るぎがなかった。

婚約者は嘘。どうして文漓はそんな嘘をつき、ここにきて明かす気になったのか。
瀞の未練を断ち切りたいなら、嘘をついたままの方が良かったはずだ。しかし追いかけるというのも受け入れられそうにない。
「こんなん……絶対眠れないし、今日……」
文漓の部屋の片付けを始めてから、紫音は全く話さなくなった。まるで無理に眠っているようで、その引きこもりも気になる。

何故追いかけてはいけないか、それを明日、きくしかないのだろう。場合によっては、無理やり押しかける覚悟を決めるしかない。
本当のことを話したい。そう思ってくれた文漓の変化が、烙鍍の言う通り瀞の行儀良さにあるなら、最後までそれを貫くのみだ。

結局ほとんど眠れなかったが、せっかくの最終日は、今まで以上に文漓に楽しんでもらわなければ。暗い顔は決して見せずに、瀞は朝から意地でも幸せオーラを纏う。

　最終日のテーマは「川」だった。文漓は空や森や水場が好きで、路線巡りの時にも沢山色んな自然公園に行った。
　水上バスがあったのだがあえて乗らず、単調な同じ川沿いを二人でゆっくり歩いた。
　行き先は決めず、時間を見て引き返すと決めた川歩きだ。お弁当や水筒は瀞が持参し、眠れなかったのでとことん気合いを入れて、朝早くから作り上げた。
　これまでの依頼で、お喋りはもう沢山したからだろうか。今日はただ手を繋ぎ、何処までも無言で歩き続ける時間が多い。
　それでも文漓は無理のない笑顔で、それは安らかにすらも見えた。時に強い風が哀しみを吹いても、通わせる指を包んで温かく握り返してくれる。
　楽しんでもらう、と気を張る必要はなかった。二人で川を歩いているだけなのに、互いが幸せなのは嫌というほど伝わってきた。

　変わり映えしない光景が続くので、止まった時間に迷い込んだような錯覚が楽しかった。
　それでも時計は容赦なく運命を告げる。あと五分、と瀞はあがいてみたものの、困ったように笑う文漓が首を振り、来た道を引き返す方向に入った。
「……夕方の川って、何か、別世界だよな」
「そうだね。キレイな橋が沢山あるから、私、この町が好きになったよ」
　行きはあんなに永く感じたのに、帰りの時間は沈む夕陽のように早い。明るい内は所々で休憩を挟んだこともあるだろうが、今は足早になりそうなのを文漓が抑えていることがよくわかってしまった。

　やがて、出発点の古めいた橋が間近に見えてきた所で、歩きながら文漓は話し出した。
「専門学校……この町に出て来た理由はね。誰もわたしを知らない場所で、棯（うつぎ）文漓として生きたかったからなんだ」
「……？」
　きらきらと街灯が虹のように映る川面で、南から石の橋に入ると座りよい植込がある。川を浄化するために造られたという橋で、僅かにライトアップされた夜景が見える。
　冷たい石の枡に連れ立って腰かけると、文漓が伏し目がちに小さく息をついた。やっと覚悟を決めたように先程の続きを話し始めた。

「あのね。『棯文漓』は、存在していない人なの」
「それは……ツキモノでは、そう名乗るって聞いてるけど」
　電子依頼が専門だった文漓は、「オフで会いたい」という要求をそれで跳ね除けていた。ボスも公認の身上だとは瀞も知っていた。
「でも、『わたし』は存在してる。橘診療所に行くと、みんなが知ってるのは『わたし』で……だから私、離れなきゃいけなくって」

　文漓の声色に深い陰が差した。瀞の背にもひやりと冷たい予感が夜の帳(とばり)と共に訪れる。
「……檢文漓は、存在しない『ツキモノ』。私は、茨月くんにとり憑く紫音と同じように、院長先生の娘さんの体を使う死んだヒトなの」
「……――」
「悪魔かな、それとも悪霊かな？　　私は……人間になりたかった化け物なんだ」

　文漓は以前、お父さんが二人いると言った。
　瀞にとり憑く時に、紫音は人間になりたい化け物に愛の手を、と言った。それらの真の意味を今更思い知らされ、瀞は咄嗟に何一つ言葉を紡げない。
　隣に座る文漓の顔も見られなかった。必死に坦々と話している彼女の邪魔をしたくない。

「私が体を使っているから、死んだ娘さんの体も保たれてる。今この時間は、優しい死神の紫音が私にくれた、私の最後の夢なの」
「……夢……？」
「私……人間に、なってみたかったの」
　そこで文漓の声が崩れた。一際冷たい風が暗くなった灰色の橋面に打ち付けていた。
「私、生きてる時は病気だったから、学校に憧れてた。バイトやお出かけをしてみたかった。優しい人と恋ができたらって思ってた」
「――」
「死神は死んだ人を天国に送るための神様。でも水月は私を送れなくて、代わりに紫音が生まれた……紫音は私に、未練を叶える時間をくれたの。その代わり、その時が来たら絶対、この体から出て行くと約束をした」

　震える文漓の声を聴きながら、紫音がここ最近、だんまりを決め込んだ理由がわかった。
　最初から紫音は「死神ちゃん」と名乗っていた。冥府の化身たる月、そこへ導く月光の天使なのだと。
「だからありがとう、茨月くん。茨月くんのおかげで、私の夢は全部叶ったから」
　あまりのことにいつしか瀞は、呼吸すらも忘れた。ぐらりと瞼(まぶた)の内にまで夜が襲い来る。
「だから……私を追いかけて、天国に来ちゃダメだからね」

　ここでお別れ。苦しく笑う文漓の顔を、見れないどころか瀞の全身が崩れ落ちた。
　黒い羽が背に生え始めたので、紫音に体の主導権を奪われたのだ。けれど瀞が抵抗しているから、紫音もまだ現れ切れずに倒れた。

――そんなの……そんなのって……！

紫音と文漓の約束の時が、二月二十四日なのだろう。つまり紫音は今夜、文漓を天国に送ってしまうつもりなのだ。

――待ってくれ、紫音！　五分でいいから――あと五分でいいから、話をさせてくれよ！

瀞が何も行動しなかった、と紫音は臆病さを責めた。それも当然の話だった。

永遠の別れがそこにあるのならば。瀞だって沢山、文漓に言いたかったことがある。

別れることになっても、文漓は実家で幸せになると思っていた。だから瀞のことは気にせず幸せになれるよう、色んな想いを沢山封じ込めてきてしまった。

こんなにも容赦ない別離とは思わなかった。死別とは往々にしてそういうものだろうが、この不意打ちは卑怯だ、と瀞は体の中で叫ぶ。

わかってはいるのだ。瀞がこれ以上文漓に未練を作るといけない。紫音はきっとそれを心配している。

それでもまさか、お別れを言える五分すら与えられないなんて――

どれだけ必死に抗っても、死神の黒い羽が瀞の心まで闇に落していくようだった。

そうして強硬策を取った紫音も、想定外の事態と見えた。きっと文漓が嘘をついたまま、この夢の時間は終わるはずだったのだから。

――私が好きなのは茨月くんだけだから……。

ただ一つ、彼女がそれを、どうしても言いたくなってしまったがために。

ごめんね、と最後の声が夜に融けて消えた。

瀞の意識も此岸の橋に堕ちた。返す声は寄る辺の水の堰（せき）に浄（あら）われ、流されていった。

あと五分　-了-

オマケ：紅

　誕生日周辺くらいはかまってほしい。
　これが三年目の依頼だという、淋しい悪魔――氷輪水月（ひわみづき）は、生まれてこのかた、少年の外見は歳を取っていないという。何でも三年前に、そもそも鬼の類で長く昏睡状態のミズキ少年に、強引に憑いた悪魔なのだ。
「だからまあ、オレも『ツキモノ』仕事仲間かな。ただ生きてるのがオレの仕事なのです」
　両親は遠方で、本物でない息子の体が再び動いてくれるのはいいが、そばにいると情が移りそうで同居の予定はないとのことだった。
「本人が起きたらオレは眠るよ。でも正直、起きる気しないんだよね、コイツ」
　一人暮らしには広めの１ＬＤＫで、水月は引きこもって生活している。橘診療所従業員扱いで、費用は玖堂家が負担するという話が瀞（せい）は少し羨ましかった。
「それ、ここで生きること以外、本当に何もしなくていいの？」
「してない。毎年誕生日だけ遊んでもらう」
　きけば、水月の体は鬼の類で、人間と同じ食事は要らず何も食べないという。
「人間食べたい。って言ったら、それはダメって言われて、紫音（シオン）と約束してる」
「そりゃ、うん……すみません、それならできれば外に出ないで下さい、確かに……」
　外が嫌いなわけではない水月が、生活費の負担を代償にこの部屋に閉じ込められているとすれば、それはそれで幸せとは言い難い。テレビもパソコンも何もない部屋。ここでただ寝て起きるだけの生活よりは、堂々と働ける人間の瀞は平和だと思い直した。

　平日は毎日夕方、休日は昼から夜まで家を訪ねるのがこの二週間の仕事だ。これだけが毎年楽しみという水月の家を出て、瀞は一人呟いていた。
「鬼かあ……やっと日本らしい化け物が出てきたけど、化け物って結構淋しいものかな」
　鬼に憑く悪魔。そう思うと何かと不思議な少年だが、始終無表情で、たまに少し笑い、とりあえずマイペースなのは確かだ。
　瀞の内では自称天使の紫音が、文漓のマンションのエレベーターを待つ間に応える。
――気になるなら、スマホだけは持ってるから番号交換してやれば？　喜ぶと思うけど。
「それは見せてもらったけどさ。メールする姿も想像つかないというか、面倒がりそう」
　文漓のマンションとほぼ同じ間取りの水月の家で、部屋にはベッドの隣にスマホを置くサイドテーブルとクローゼットだけがあった。
　淡い紫のスマホは大事に手入れされていて、画面にほとんど指紋もついていない。以前は文漓（カザリ）が持っていたお下がりなのだという。

「文漓の今のスマホ、凄く赤いよな。同じ人が選んだと思えないくらい」
――それはそうだね。前のはラクトの大事な子が選んだやつだったからね。

平日夕方までは毎日専門学校があるので、帰ってすぐシャワーを浴びて、寝る用意をする。朝は早めに起きて、朝食と文漓のお弁当を作っておきたいからだ。
ツキモノ仕事中の夕飯は、誰もが別々だ。文漓が買い物してくれる冷蔵庫の中身を確認していると、文漓がダイニングに入ってきた。
「今日もお弁当、ありがと、茨月(しづき)くん」
おいしかったよ。と、それを言うためだけに部屋から出てきたらしい。優しい彼女だ。
ラインでも言ってくれるのに、と有り難く感じたところで、昼間に水月のスマホを見て不思議に思ったことを瀞は思い出した。
「そう言えば文漓。氷輪水月と文漓は、一応メル友なの？」
「うん？　そうだよ。ツキモノのお仕事じゃなくて、普通に友達」
「今日水月のスマホをちょっと見せてもらったら、文漓の表示名『風漓(かざり)』になってたんだ。間違いだったら水月に言って直しとく？」
あ……と、文漓の表情が笑顔のまま固まってしまった。何気なくきいたことだったのに、あまり良くない質問だったらしい。
水月はラインをせず、メールの通知で表示される名前はスマホ内のアドレス帳のものだ。だから水月が登録し間違えたのだろうと瀞は思っただけなのだ。
「……いいの、そのままで。気にしないで、茨月くんは」
これはもしや、昔の黒歴史のハンドルネームか何かなのだろうか。名字もなく「風漓」とだけ登録されており、水月にきいてみたい気もしたが、文漓の言う「気にしないで」は詮索してほしくない意味に思える。忘れよう、と瀞はあっさり心を決めた。
ただ、「風漓」の字面はキレイだと思った。
それが彼女本来の名前であることを、瀞が知る日はまだ当分先になる。

それではここで問題です、と。テレビなど見ていないくせに、スマホの動画でごく偶にクイズ番組を漁るらしい水月が、何回目かの謎かけをまた始めた。
「ヒトの名前とは何でしょうか。ヒトが名前を変える時、何が起こっているのでしょう」
まるで瀞が、「風漓」の不思議を見つけたことに気付いているかのような問いだ。この件は詮索しないと決めたので、さぁ、と流す。
平日は家でテイクアウトスイーツ、休日はケーキ屋巡りという祝いになった水月の依頼で、瀞が淹れたコーヒーに大量にミルクを混ぜながら、水月はにこにこと尋ねる。
「瀞君も名前を変えてるでしょ？　そこにはどんな意味があったのでしょう」
ぐ。と痛いところをつかれる。瀞の戸籍は正確には「茨月瀬衣」で、履歴書や願書にはこちらを書いて出さなければいけない。大体似たような一文字にしたと言って、瀬衣から瀞で専門学校以降は名乗っている。
瀞で通すのは主にラインだ。それで周囲と連絡をとることが多いので、自然に瀞で浸透してくれている。親や地元の知り合いはハンドルネームだと思っている。

「意味って言っても、別に深い意味は……」
「深いかどうかは、受け取る方が決めること。そっか、瀞君にとっては深くない話なんだ」
　何故か水月がいきいきとし始めた。いつも無気力そうな紅(あか)い目なのに、謎かけをするときらきら赤い眼に変わっていくのだ。
　床の上の小さな折りたたみテーブルに、所狭しと置かれた二人分のスイーツとコーヒーが、しばらく放置されることになった。
「そもそも、何で知ってるんですか、それ」
「登録してくれたアドレス帳。名前見てから、嘘っぽいなと思っただけ」
　滅多にメールは使わない瀞だが、水月のスマホには、今後お得意様になるなら、と登録をさせてもらった。それだけで素性を半ば見抜かれるなら、悪魔とは怖いものだ。
　そもそも人名用漢字でもないので、不審で当然だったかもしれない。
「単に、元の字はいかにも女だからです。紫音に聞いたでしょーが、おれ、体は女だし」
「……聞いてない。瀞君、凄いこと言うね」
「え」
　橘診療所では自然に言われたため、最早紫音の関係者には周知事項と思っていた。
　水月の眼がますますきらりと、赤く光る。確実に墓穴を掘ったことに瀞も気が付く。
「体は女。じゃ、心は男と言いたいのかな。それじゃあ男と女、それは何で決まるのかな」
「……それはおれがききたいですよ。理由もなく生まれつき、かっこよくなりたくって」
　それは瀞の本心だった。親にも幼少から男の子向けの玩具ばかり気に入ると言われた。
　橘診療所で会ったツキモノのボスにも、「何故かっこよくなりたいのか」ときかれ、瀞は答が出せなかった。自分は男で、かっこよくありたい、瀞の想いには理由がないのだ。

「紫音は陰陽思想を採用してるけど、それも難しい話だよね。体は確かに陰陽があるけど、心の陰陽が同じとは限らない、だから瀞君のような人が生まれるって立場だと思うよ」
「それ、体と心の陰陽は別ってことですか」
「そう仮定すればの話。実際どうなんだろうね。体だって陰陽の複雑なものがあるし、心にもどっちつかずはあるし、そもそも心と体は別物ですか？　そこからして怪しいよね」
　考え出すと確かに難しい話だった。瀞の体は普通に女性のものだが、先天的にどちらと言えない体を持つ人間もいる。小児科医の親は便宜上、「Ｙ染色体があれば男」説を採用しているが、それでも女性として育つ個体があると知っているらしい。そして瀞のような者は「性別違和」の病気だと言うだろう。
「オレはね、瀞君。瀞君仮説を採用したいと思いました」
「――は？」
「根本にある心が『かっこよくなりたい』か『可愛くなりたい』か。これもややこしくはなる分け方だけど、生き物としての男女には、それが結構しっくりくると思うんだよね」

　すっかり冷めてしまったコーヒーを、ちまりと飲んで水月は仕切り直しす。

「陰陽思想でも、陽の男は能動志向、陰の女は受動志向と言ってね。どちらも完全に偏りはせず、陰の中に陽、陽の中にも陰がある」
「……はあ」
「究極、愛したいか、愛されたいか。そして迫害されたくないか、踏み込まれてもいいか。瀞君ならどっちが強そうですか」
「……それ、物凄く難しいんですけど」
　瀞の理想としては、愛されるより愛したい。そして迫害されたくなく、人にもあまり踏み込まない、そういう生き方をしてきただろう。
　けれどそれはあくまで理想だ。瀞の現状は限りなく、期間限定とはいえ文漓からの愛で成り立っている部分が大きい。
「うん、そうだよね。表の理想と、実際どう望んでるかは別だからね。もし『かっこよくなりたい』理由が『愛されたい』からなら、それ、本当は『可愛くなりたい』思いだし」
　「可愛い」。読んで字の如く愛されるもの。そうなりたいわけではない人は多分少ない。
「だから迫害の基準もつけたんだ。能動的で、外に働きかける陽は、つまり自分の内に入られると困る。陰は逆で、周囲から貰う、外から踏み込まれるのが前提。それで言えば瀞君は、愛したく迫害されたくない、純正男じゃないかと思う。あくまでオレは」

　なるほど、と赤い眼に頷きそうになった。しかし世の中にはきっと、能動的でかつ愛されたい女も、受動的でも踏み込まれたくない男もいるだろう。
「『かっこよくなりたい』に理由がないなら、尚更瀞君は男だと思うよ。応援してるね？」
　大事なのはその根本だと。見透かすような赤の眼はまた紅に戻っていった。
　無気力な紅には確かに、淡い紫のスマホが合うのだった。

-了-

☒５：ツキモノ、始めました

図3：ライセンス、始まりました

　出会って一年もたたず、光のような初の彼女に先立たれた。いつも優しく、立春の寒気を微笑みで温め、生活まで助けてくれた人に。
　死別の実感が乏しいことしか救いがないとは。
「いやさ……なまじ理想だったからさ、ギャップがさ……」

　文漓（カザリ）が消えてから、瀞（せい）はもう一週間、専門学校を休んでいる。高校時代に自力で学費を稼いだ、生きるための学校なのに。
　次のツキモノまでに回復できるだろうか。烙鍍（らくと）は昨日の満月で仕事を終え、無表情に帰ってくると、何故か瀞に文漓の部屋を使えと促した。ちゃんと睡眠をとれ、と押し込められた。
「これ、烙鍍と紫音（シオン）はずっと耐えてたのか……そりゃ、何も言わないよな……」

　ずっとここにいよう、とかつて烙鍍は文漓に言ったはずだ。そして紫音は反対だった。それは多分、文漓が未練で苦しむからだ。
「紫音も結局、文漓が可愛かったくせに……」
　あれから紫音は何も応えてくれない。役目を終えたからか、瀞と烙鍍に悪いと思っているのか、それはそれで紫音が居た堪れない。
　すっかりポンコツ化した瀞は、トイレに行くだけでやっとだった。このまま死ぬまで文漓の匂いが残るベッドで突っ伏していたい。

　リビングでは烙鍍も静かに眠っている。生活は当分心配するな、と言ってくれた。文漓を最後まで大事に想った瀞に、見かけ以上に感謝しているらしい。文漓に助けられてきたのは瀞なのに。
　あまりの情けなさに起き上がれない。もう紫音が瀞になればいい。そう思った瞬間、突然、珍しいインターホンが台所から響いた。
「……え」
　烙鍍が応えに行く気配はない。何故か、出なければいけない気がした。
　荷物を頼んだ覚えはないし、瀞も出たくない。でも、もしも文漓だったら、と思ってしまったのだ。

面倒なので直接ドアを開けると、パジャマのままの瀞の前に、思わぬ人が廊下に立っていたのだった。
「こんにちは。やっぱり落ち込んでる？　瀞君」
氷輪水月（ひわみづき）。文漓を本来葬送するはずだった悪魔。
唖然とする瀞を紅い目が見つめる。そこに瀞の背後に立った者が映る。
「烙鍍も久しぶり。その顔はどうやら、答が出てるみたいだね」
「.....」

どういうこと？　と辛うじて聞き返すと、悪魔は相変わらずの謎かけを口にした。
「さて。今の瀞君には何が必要ですか。助言か夢か、それとも真実か」
「それは.....真、実？」
この胸の穴は、慰め程度では救われそうにない。だからそう答えた。水月が穏やかな顔のまま笑った。
「おーけー。紫音はオレが抑えとくから。瀞君をカザリの所に連れてってあげて、烙鍍」
「って――へっ!?」
呆気にとられる瀞の後ろで、薄着の烙鍍が細い溜め息をついた。
その白い吐息は、悪魔に咄嗟に応えてしまった瀞への哀れみに満ちていた。

水月が「送ってあげる。帰りは紫音次第」と言って、普段着に白いコートを羽織った瀞を、烙鍍とまとめて橘診療所の門外にワープさせてしまった。あの瞬間移動は元々水月の力らしく、紫音はそれを借りるという。
突然の展開に今更腰が引けた。「真実」とは何なのか、言い知れぬ不安が首をもたげる。
「あの.....これ、どういうことなんですか、烙鍍さん.....」
水月の言った通り、瀞の中では紫音が全く目を覚ましてこない。本来水月がするべき文漓の葬送を請け負わされた、とても不憫な月光の天使。
黒いコートの烙鍍が、診療所のある玖堂家全体を蒼い目で見つめた。
「.....ここの地下に、あんたの探し人は入院してる」
「――え？」
「そう言って訳知り顔で院長に案内させろ。紫音が邪魔をしなければ、院長はあんたを止めるほどの義理はない」

「カザリがとり憑いた体のお父さん」の院長。果たしてこれ以上踏み込むべきだろうか。
ここが正念場なのだ、と本能的に瀞は息を呑んだ。
きっと今ならまだ引き返せる。流されるのでなく、自ら日常を捨てる覚悟はあるか――

烙鍍の言う通りに訪ねると、院長はあっさり地下に通してくれた。

病床を申請していない橘診療所では、地下は極秘の領域らしい。黒ずくめの医者は奥の部屋を指し示したところで踵を返した。
「まあ、ここのスタッフの大半は人形だ。だから俺達は悪魔扱いされる」
何の話かはわからない。それでも知ったかぶりを通し、開けられた一つの扉の奥で瀞を待っていたものは――

梍(うつぎ)文漓だった人が横たわる、真っ白なだけの部屋で。端に置かれたベッドの横、患者に付き添う小さなカラクリ。
一目で人形とわかる紫苑色の髪の少女が、髪と同じ色の目を大きく開けて、動かない瞳孔で扉を開けた瀞を凝視していた。
「なん、で.....茨月(しづき)、くん.....」
あどけなく硬質な声が、立ち尽くす瀞の耳孔を貫く。
付き添われる文漓だった人は身動き一つせず、蜘蛛の糸のような点滴に繋がれている。瀞の視線は紫苑色の髪の人形の方に一瞬で惹きつけられた。
「まさか.....かざ、り？」
人形は紫苑色の髪を肩の高さで二つに括っている。さらさらな髪を束ねる蜜柑色のリボンが、瀞に確信を持たせていた。
「かざり.....なんだろ？」

死体のように横たえられた人間ではなく、そばにいる精巧な人形。
確かにそれは扉を開けた瞬間、瀞の名前をうっかり呼んだ。顔付きも声色も瀞が知る梍文漓とは違うが、まずどう見ても人形が、喋っているだけでおかしい。その上人形は文漓が大事にしていたリボンを着けて、文漓と一音違わぬ発音で瀞を呼んだ。

瀞が来たことに相当ショックを受けたらしく、人形は石像のように固まってしまった。
眠り続ける梍文漓だったものの、心臓の拍動を示すモニターの音だけが、瀞と人形の間にしばらく響いていた。
硬直している人形の所へ瀞は静かに近付く。
人形は座っていた椅子の上に立ち上がり、両手を胸元で握り締めて震える。
人間の半分ほどのサイズしかないため、椅子に乗っていなければ瀞と目線が合わない。眠る者を瀞から守らんとばかりに、間近に来た瀞に向かって両手を広げた。
「だめ。猫羽(ねこは)に近付かないで、茨月くん」
「.....――」
「どうしてここに.....紫音はどうしたの？　茨月くんと一緒じゃないの？」
人形はもう、瀞が悟っている正体を隠すことは諦めていた。
その人形は確かに梍文漓として喋っている。天国に行ったはずの文漓がこの橘診療所にいること、そして文漓から体を返されたはずの者は目覚めていないこと。それが今わかる全ての現状だった。

「やっぱり、かざり……なんだな？」
「……」
「……ごめん。おれ……どうしてもかざりに会いたくて、ここに来たんだ」
　そうして通せん坊をするような人形を、瀞はそのまま、人形の足が僅かに浮く程度に強く抱き締めていた。
「ここに、いるんだろ。どうして教えてくれなかったんだ――かざり」
「――……」
「人間でなくてもおれは気にしないよ。悪魔でも悪霊でも何でもいいから、生きられるなら、生きていてよ」

　腕の中で人形が強く瀞を掴んで震えた。「人間になってみたかった」、非力過ぎる小さな少女がそこにいる。
　ダメ、と真っ先に、くぐもる声を嗄らせて人形の文漓が口にしていた。
「……ごめんなさい、ごめんなさい……私、茨月くんに関わってほんとにごめんなさい」
　人形はどうやら泣くことができないらしい。声は今にも崩れ落ちそうなのに、瀞を見上げようとする目には何の表情も浮かんでいない。
「とりあえず……ほんとのこと、色々話してよ、かざり」
　腕を緩めて人形の少女を見下ろすと、観念したように静かに頷いていた。
　今まで人形が座っていた椅子に瀞を座らせ、人形は眠る者のベッドの足下に腰かけて、人間ならぬ大きな紫苑色の目で改めて瀞を見つめたのだった。

　棯文漓は存在していない、と、別れの時に彼女は言った。
　それ自体は何も嘘ではないらしい。眠る棯猫羽という人間にとり憑いていたことまでは。
「私が死んだヒトと言ったのは本当のこと。でも紫音は別に、私を葬送するためにそばにいたわけじゃない……紫音の死神が本当に黄泉に送らないといけないのは、ここにいる猫羽の霊なの」
　辛うじて細い呼吸を保つものの、死んだように白い顔で眠る人間。
　それより今こうして喋っている人形の方が、余程しっかりと生きている。
「私のせいなの。猫羽は元々、私のたった一人の、大事な友達だったのに……私こそが猫羽を、この体から追い出してしまった」
「……？」
「私は烙鍍の双子の死霊。烙鍍は猫羽を妹みたいに大事に思ってて……猫羽を守りたくて烙鍍は私を猫羽に憑けたのに、私は猫羽を守れなかった……ううん、私のために、猫羽の魂はこの体を出ていっちゃったの」

人形の少女が弱々しく白いシーツを掴む。俯いた目線を瀞と合わせられず、自身の薄い灰色のワンピースだけを見下ろしていた。
「私は死んでから烙鍍の守護霊みたいなものになった。今みたいに『私』を再び自覚できるようになったのは、烙鍍が私に気付いてくれてからなの」
烙鍍がいれば咲ける紫陽花。いつかにそう言った彼女の真意はおそらくそれだ。
「猫羽はほんとに危なっかしい子でね。淋しそうな存在を見つければ、悪魔でも悪霊でもそばに置いちゃうの。魂の境界が脆弱なんだって烙鍍は言ってた」
「魂の.....境界？」
「私に前は『私』という意識――境はなかった。烙鍍が憶えてる生前の『私』が、死んだはずの私にもう一度自我をくれた.....でも、猫羽にはその逆のことが起こってしまった」

瀞は改めて、白い掛け物の中で眠る者の顔を見つめる。
体は温かく、ただ眠っているだけのような姿。しかしそこには「猫羽という意識」だけが存在しないのだと言う。
「私が自我を持ってしまったせいで、猫羽は私という存在に影響されるようになった。猫羽に近付く悪魔や悪霊から、私は猫羽を守るはずだったのに.....」
それはおそらく、彼女が悪意のない化生であったからこそ、引き起こされた悲劇だった。
「.....思っちゃったの。人間として、楽しそうな猫羽を見てて、私.....いいな、って」
「.....かざり」
「だからって、猫羽の体を譲ってほしいとか思ってなかった。それはほんとなの。でもある日、猫羽は不意にいなくなってしまった.....私がこれから、猫羽になればいい、って」
猫羽を守ろうとする死霊を、猫羽は自らと同じように大切に想った。
いつしか二人の境界が消えた。正確には猫羽が己を、死霊の意識より不要のものとして捨ててしまったのだ。

「魂がなくなった人間の体は、たとえ命が残ってても、簡単に周囲の環境に侵蝕される。猫羽の心はここにあるけど、そこにはもう猫羽の魂――猫羽という名前がないの」
「――」
「私は猫羽の体を守りたかった。猫羽に還ってきてほしいの。でも私までこの体を出て行けば、私以外の何かが猫羽に憑いてしまう可能性もある」
それで彼女は、この橘診療所に助けを求めたという。
望むのは猫羽の魂が戻ってくるのを待つこと。それまで猫羽の体をそばで守ることだった。
「三年かかったけど、死霊としての私は、猫羽の体から付喪神（つくもがみ）としてこのリボンに遷せた。猫羽との繋がりはそのまま、近くにいる限りは保っていける」
「それで今、かざりはその人形で喋ってるの？」

以前は眠る者の頭を飾っていた蜜柑色のリボン。思い入れの強いものには魂が宿りやすいといい、今の彼女の依り代はそのリボンで、眠る者につけ直せばまた体を使うこともできるのだという。
「魂を自然に遷移させるのは難しいから。でもそうしないと、私の意識まで消えたら誰も猫羽を守れない……だから大体魂が遷るまで、私は猫羽の体を使って、ひっそり生きていくだけ……のはず、だったの」

それからは先日の話の通りだ。
己が付喪神になって別の依り代に遷るまで、その期間だけであれば、人間としての幸せを望むことを赦してほしかったのだと。
「このリボンね。元は水月が、猫羽にくれたものなんだ」
「……」
「私、水月に憧れてたの。悪魔になる前、死神だった水月。だから同じ月属性の茨月くんに迷惑をかけちゃった」
水月と瀞は似ているだろうか。水月の家で死神が瀞に語りかけ、紫音も水月から瀞に遷ったなら、かの死神こそ母の胎内で死んだ瀞の双子かもしれない。もしくは瀞から、女心を紫音が持っていったのかと妄想する。
「楽しかった。水月だった紫音と烙鍍といられて、茨月くんと素敵な時間を過ごせて。だから後はもう、猫羽の帰りをひたすら待つの」
「……かざり」
「水月も烙鍍も、猫羽は帰らないって言う。紫音も私が、猫羽を待つことは反対してる」
ここまで話を聞いて、瀞にもようやく事の次第が掴めてきた。何分人外な話であるため、理解が合っているかの自信は無かったが。
「つまりかざりは……猫羽のために、ずっとここで付き添いたいってこと？」
「……」
人間で言えば、植物人間のそばを決して離れられない生活。彼女が離れればおそらく、魂がないという猫羽の体を守ることができない。
だから彼女は瀞に対しても、天国に行くという嘘を吐いてまで別れを告げたのだ。

「私はもう、茨月くんのそばにはいられない」
「……」
「私のせいなの。このままじゃきっと……私は今度こそ、猫羽になりたくなってしまう」
せっかくやっと、己を猫羽の外に遷すことができたというのに。
だから瀞の存在は、今の彼女にとっては残酷なのだ。大事な猫羽のために振り切った未練なのに、幸せになろうと誘惑する者。
紫音が止めた意味がようやくわかった。それでもここに来た瀞は、簡単に諦める気にはなれなかった。

　だから瀞は、真っ白なだけの部屋で、無知な故に言える人間の想いを伝える。
「それならかざり、今のままで、一緒に猫羽を待とうよ。おれはかざりがずっとこの部屋にいて、小さなお人形でも構わないから」
「……」
「魂がどうとか、おれには正直、何もわからないけど……今のこの人形でだって、かざりは幸せにはなれないのかな？」
　何の気なく立ち上がり、小さな人形の少女を軽々と抱き上げた。
　眠る者が目覚めない限り、この部屋でしか会えないこと。会えても彼女は人形という化け物であること。それは人間としての幸せからはほど遠く、世間的にも問題がありそうだ。
　けれどそもそも、己の体に反して男性たることを願う瀞の人生は、人並みの幸せは望むべくもなかったのだから。

「猫羽の『ツキモノ』のかざりを愛するよ。おれはそうしたい」
「……――」
　腕の中で紫苑色の人形が精一杯の目を見開く。
　この決意は互いにとって茨の道であろうことは、瀞も重々わかっている。

　おそらく猫羽の目覚めは相当絶望的なのだろう。烙鍍が諦めているのも何度かきいた。
　だから今の彼女に必要なのは、それでも信じたい彼女を支える付者（ツキモノ）だ。
　この先その想いが続くのか、それともやはり人間になりたいと願うのか、彼女がどちらを選んでも瀞は受け入れるつもりだった。
「戻ってくるか来ないかは、猫羽の自由だ。だからかざりも、できる範囲で、自由に生きていいんじゃないかな」

　人間になりたい思いを、完全に消すことは難しいだろう。そもそも消す必要はない、と瀞は思う。それで己の身を譲ってしまう猫羽の方が異常なのだ。
　彼女がこれだけ慕うのだから、実際天使だったのかもしれない。一人の猫羽から天使の紫音と悪魔の水月と、そして人間の彼女が分かたれたのだ。
　だから彼女が天使になれないことを苦しむ必要はない、瀞はそう望んでいたい。

　それからずっと、彼女は何も言わずに腕の中で俯いていた。
「また来るよ、おれ。できればかざり、スマホかパソコン、復活してくれると嬉しいな」
　せっかくこんな文明社会にいるのだから、引きこもりの人形との人生でも楽しみたい。
　元々男性に扮してひっそり生きる予定の瀞は、多少計画が変わっただけだと、現状最大の本気で伝えて診療所を後にしたのだった。

　玖堂家の敷地を出ると、高い塀にもたれて烙鍍が俯いて待っていた。
　その顔付きはともすれば、専門学校の棯文漓より冷たい無表情で腕を組んでいる。
「……」
　瀞はあえて今までになく、お待たせ、と軽く声をかけた。ぴくりとも笑わず、横目で瀞を見る烙鍍は青ざめていた。

　それは紫音が瀞の体を使ったのか、瀞が自分の意志で言ったのかは、後から考えればよくわからなかった。
「烙鍍のせいじゃない。猫羽ちゃんもおれも、これは自分の意志だから」
　ぱちくり、とまばたきをして、烙鍍が顔だけ瀞の方を向く。
　今の虚ろな様子が、瀞には烙鍍の本性に思えた。烙鍍はおそらく、文漓のために猫羽や瀞を犠牲にしたと罪悪感を持っている。
　どちらも大事な彼女達の間で、一番やるせなかったのは烙鍍だろう。
　瀞ももし、母のお腹で死んだ双子と自分、運命を交換できると言われたら双子を生かしてやりたい。でも周囲が悲しむ、それだけでも猫羽と同じ行動は取らないと思う。
　だから紫音を瀞から追い出す気もない。できるだけ楽しく共存したいし、何ならもう少し烙鍍と仲良くしてもらっても良い。
「でもラクトは、オレ（紫音）が本命じゃないんだよね」
「……」
「知ってるよ。でもオレはそれでいい。ラクトに利用されるならいいよ」
　紫音の声が遠く聞こえた。
　今まで烙鍍は、紫音が瀞の内に在ることでいちゃいちゃできない問題を、本気で解決しようとはしなかった。猫羽を「妹のように」思うなら、猫羽が烙鍍を大事に思う感情を課せられた紫音は、本来互いに恋愛対象ではないのだろう。
　今もおそらく、勘の良い烙鍍は、気安く声をかけた瀞の心変わりは気が付いている。そこに便乗しようとせず、冷めたように白い塀にもたれたままだ。
「烙鍍は猫羽もかざりも残したいし、幸せになってほしい。おれもそれは同じだから」
　橘診療所で眠る者のことを瀞に教えた。それが烙鍍の答だろう。
　未来はどうなるかわからないが、烙鍍はこれまでの同居を通して、瀞が彼女達の現状を受け入れることを信じてくれたのだ。
　だからもう月夜烏の仮面はいらない。瀞の度量を試す必要はない。
「ラクトも自分の居場所に帰ればいいのに。猫羽ちゃん達やオレに遠慮せずにさ」
「……」
「自分だけ幸せになっちゃいけない。どうせ、そんなとこだろうけど」
　そろそろ紫音が優位になってきた。瀞の与（あずか）り知らぬことまで体が勝手に口にしている。

　しかしそこで烙鍍はむしろ、瀞とまともに話す気になったようだった。僅かに上がった口元が穏やかな微笑みをたたえる。
「それは無理な話だろ、さすがに。茨月一人であのマンションに住むのは、せめて卒業して仕事も安定してからでないと」
「うぇ。それを言われると身も蓋もないな」
「俺も稼ぐよ、当分一緒に。今後の生活をどうしていくかは、茨月の好きにすればいい」
　よく考えれば名字とはいえ、名前を呼ばれるのは初めてだった。ここに来て気を許したらしい烙鍍は、続けて大変なことを言う。
「文漓が貯めてたお金もあるから。二年目の学費の足しにって、伝言も頼まれてるし」
「――って、へ!?」
「玖堂家には内緒でよろしく。仕送りもかなり、へそくりに回してたから」
　結局この二月まで、瀞は思うほどお金を貯められなかった。これからまた夜のバイトもするか、と考えていた矢先で、浅はかな自分を見透かされたようで恥じ入ってしまう。
「……ごめん。今おれ、すごくかっこわるい」
「知ってる」
「でも助かる。二人に心配かけないよう、頑張るって約束する。だからもう少しだけ……助けてくれると、正直助かる」

　それでなくとも瀞はワケありなのに、独力で苦労しないわけがなかった。
　女性に生まれたのに、男性として生きたいこと。親にも社会にも隠し続けたいこと。
　茨の道と知っていても、人形の少女と共に生きたいと願うこと。
　そんなもろもろを一人で叶えようとすれば、ただ生きていくだけであまりにしんどい。この一時の幻想だとしても、チャンスは何でも鷲掴みにしなければいけない。

　悪魔に送られた館の塀の前で、伏し目のまま白い息をついて烙鍍が笑った。
　きっと瀞も、橘診療所に魂を奪われてしまった。それでも縋らずにはいられなかった。

ツキモノ、始めました　-了-

オマケ：赤

赤と紅。二色の目を持つ少年水月の悪魔は、天使の紫音が内から分かたれるまで、蒼い目の死神だったことを後に瀞は聞いた。

死神である頃は瀞に近く、体は一見女性、心は男性だったそうだ。だから性別問答などされた時に生き生きとしていたのか、と昨年の仕事を思い出した。

「今の鬼の体は、完全に男の子らしいけど。おれにわざわざ協力してくれた理由、その辺りも関係あるのかな？」

死神は、自らが「ツキモノ」だと告白した棯文漓や、彼女の体の主を葬送できなかった。代わりに紫音が生まれ、死神の力を失った悪魔が水月になった経緯。

そして文漓が消えてから、彼女が潜む橘診療所に瀞と烙鍍を送った水月は。

「よっぽど風漓と猫羽を葬送したくなかったみたいだよな。紫音も本当はそうなんだろ？」

――オレは単に、猫羽ちゃんを何とかしたかっただけ。役目とか嘘っぱちだよ、実際。

すっかり瀞の私物を移させてもらった文漓の部屋では、紫音が時々、うっすらとした姿で瀞の外に現れるようになった。瀞に憑く前にはそうして、黒い胸空きシャツとショーツの映像だけで、この部屋でよく寛いだらしい。

瀞が彼女――今では人形として動く風漓の真実を知るまで、紫音はずっと意識を閉ざしていた。同じ体にいる以上、そうでもしなければ隠し事を守り切れないからだ。

「じゃあ紫音は最初から、無理に二人を葬送しなくて良かったってこと？」

――死神の力は、確かに受け継いだけどね。風漓に体を渡して迷い出た猫羽ちゃんの魂を、ミヅキは誰にも盗られないように奪って、その一部がオレになった。シヅキがあの鏡で見た死神のオレは、猫羽ちゃんを体に還らせるつもりが、猫羽ちゃんとして生き出した風漓に情が移った困ったちゃんなの。だから風漓の存在を守る――風漓にいてほしいシヅキに、望みを叶えると持ちかけたんだよ。

これは風漓にも話していない秘密らしい。紫音と文漓は猫羽を助ける同志のはずで、文漓が名の字を変えたのは本当の自分をあの体に馴染ませないためだという。

もういない部屋の主を思うように、紫音は暗い窓側の壁にもたれて座り、切なげに文漓の残したベッドを見つめていた。

――カザリが望むから、オレは猫羽ちゃんを取り戻したかったよ。でもオレも、風漓とのこの生活が楽しかった。だからシヅキに、あの時『シオン』を見られたんだね。

「それじゃ.....あの『シオン』は、いったい誰になるの？」
　今では死神の力を失い、水月として昏睡の少年の体で、ただ生きているだけの悪魔。
　ここから出して。あの声は何度も脳裏をかすめ、離れてくれなかった。
――シヅキの双子、もしくは光だといいね。オレにも正直、それはよくわからない。
　紫音は死神の「シオン」が、猫羽に関わって生まれた天使。だから死神の出自については、紫音も詳細を知らないのだという。
「そっか。でもおれ、紫音みたいなのが双子だったら、毎日楽しかったと思うな」
――オレは楽しくないもん。確かにシヅキの体は居心地いいけど、シヅキは風漓のだもん。
　何だそりゃ。と笑うと、部屋から紫音の姿が消えた。瀞の中に戻って眠るのだろう。
　文漓がいなくなった影響で、今までより意識が保ち難くなると言っていた。水月がいれば紫音は存在できるが、誰より紫音を必要としてこの世に映していたのは文漓らしい。

　少ししてから、枕元で赤いスマホが鳴った。はっ、と飛び起きる。
　文漓が使っていた鮮やかな赤のスマホは、猫羽をイメージして選んだ機種だという。
　水月に渡された淡い紫のスマホが猫羽の物だ。そちらに瀞は紫苑色の風漓を重ねる。
　無線だけで通信する赤いスマホは、これから瀞と風漓の専用ホットラインになる。
　外には持っていかないでくれと頼まれた。画面に映る人形の風漓は、この部屋でならいつでも話せる生涯のパートナー予定だ。
「今晩は、風漓。元気？　　退屈してない？」
「茨月くんこそ、ちゃんとご飯食べてる？　　烙鍍は買い物とか全然しないから、忙しくても野菜や卵は新鮮な物を揃えてね」
　ぎく、と早速痛いところをつかれる。
　烙鍍は食事がいらないと言う。一人分だと自炊するのも気億劫で、必ずしも経済的とも限らないので、ちょうどさぼり始めた今日この頃だった。

　もう彼女と一緒にご飯を食べられることはない。さりげなく重い現実がふと胸を衝く。
　人形になった風漓は笑わない。表情や声色を変えられるのは慣れてからだという。
　幸せとは何だろうか。今までの光のような日々と違うのは確かだった。
　それでも幻だけの月明かりより、赤いスマホの拙い温かさを瀞は望む。

Many thanks for your visit.
★ 2023.4.6：本作公開　今後表紙差し替え予定 (https://puboo.jp/book/134788)

ツキモノ -白-

著　　pierrette***

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社